

けりと宣へば、親義申しけるは、誰も夕べ承りたく候ひしかども、折節相勞る事の候ひて承らず候。此の後は常に立聞き候ふべし。平家は代々、歌人才人たちにて渡らせ給ひ候。先年あの人々を花に喩へて候ひしには、此の三位。中將殿をば、牡丹の花に喩へて候ひしかとぞ申しける。三位。中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみ、兵衛の佐殿、後までもあり難き事にぞ宣ひける。

其の後、中將 南都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えしかば、千手の前は、なか／＼物思ひの種とやなりにけん、やがて様をかへ、濃き墨染に褰れ果てて、信濃の國善光寺に行ひ澄まして、彼の後世菩提を弔ひけるぞ、哀れなる。

○横 笛

さる程に、小松の三位。中將維盛。卿は、身がらは八島にありながら、心は都へ通はれけり。故郷に留め置き給ひし北の方。稚き人々の面影のみ、身にひしと立添ひて、忘るゝ隙も

【我身かな】底本及諸本「我身かは」。今元和片假名活字本に従ふ。

【結城の浦】阿波海部郡三岐田村由岐浦。

【和歌】和歌の浦。七頁【吹上】九七頁。

【玉津島】和歌の浦鎮座衣通姫は允恭天皇妃。

【日前國懸】紀伊海草郡宮村秋月鎮座。ひのくまくにかかすの宮。

【紀伊の湊】紀の川河口の地。

なかりければ、あるにかひなき我が身かなとて、壽永三年三月十五日の曉、忍びつゝ八島の館をば紛れ出で、與三兵衛重景、石童丸と云ふ童、船に心得たればとて武里と云ふ舍人の館をば召具して、阿波の國結城の浦より船に乗り、鳴戸の沖を漕過ぎて、紀伊の路へ赴き給ひけり。和歌・吹上、衣通姫の神と現れ給へる玉津島の明神、日前國懸の御前を過ぎて、紀伊の湊にこそ著き給へ。それより山傳ひに都へ上り、戀しき者どもをも、今一度、見もし見えばやとは思はれけれども、叔父本三位。中將殿の生捕にせられて、京鎌倉に恥をさらさせ給ふだにも口惜しきに、此の身さへ囚はれて、父の骸に血をあやさん事も心うしとて、千度心は進めども、心に心をあらがひて、高野の御山へ参り給ふ。

高野に年頃知り給へる聖あり。三條の齋藤左衛門茂頼が子に、齋藤瀧口時頼とて、もとは小松殿の侍たりしが、十三の年本所へ参つたり。建禮門院の雜仕横笛と云ふ女あり。瀧口これに最愛す。父、此の由を傳へ聞いて、世にあらん者の婿子にもなし、出仕なんども、心安うせさせんと思ひ居たれば、よしなき者を思ひそめてなど、強に諫めければ、瀧口

【本所】瀧口の陣所。【雜仕】雜役をする下藤の女官。

【西王母】支那の仙女。天降つて三千年にして實るといふ桃實を漢武帝に奉つたといふ。
 【東方朔】漢武帝頃の方士。東方朔。長壽だつたといふ。
 【石火の光】和漢朗詠集「蝸牛角上爭何事。石火光中寄此身。」

【善知識】二五頁

【往生院】洛外嵯峨清涼寺の西にあり。

【梅津】山城葛野郡梅津村梅津。

【大井河】大堰川。嵯峨松尾邊での桂川の稱。

申しけるは、西王母と云つし人も、昔はあつて今はなし、東方朔と聞きし者も、名をのみ聞いて目には見ず。老少不定の境は、只石火の光に異ならず。たとひ八長命といへども、七十八十をば過ぎず。其の中に身の盛なる事は、纔に二十餘年なり。夢幻の世の中に、見にくきものを片時も見て何かせん。思はしきものを見んとすれば、父の命を背くに似たり。これ善知識なり。如かじ、浮世を厭ひ、眞の道に入りなんとて、十九の年髻切つて、嵯峨の往生院に、行ひ澄ましてぞ居たりける。

横笛、此の由を傳へ聞いて、我をこそ捨てめ、様をさへ換へけん事の恨めしきよ。たとひ世をば背くとも、なかば、かくと知らせざらん。人こそ心強くとも、尋ねて恨みんと思ひつゝ、或暮方に、都を出でて、嵯峨の方へぞあくがれける。頃は二月十日餘りの事なれば、梅津の里の春風に、餘所の匂もなつかしく、大井河の月影も、霞にこめて朧なり。一方ならぬ哀れさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞きつれども、さだかに何れの坊とも知らざれば、此處に徘徊ひ彼處にイみ、尋ねかぬるぞ無慚なる。住み荒したる僧坊に、

念誦の聲しけるを、瀧口入道が聲と聞き澄まして、御様の換りておはすらんをも、見もし見え参らせんが爲に、妾こそこれまで参つて侍へと、具したる女に云はせければ、瀧口入道、胸打騒ぎ、あさましさに、障子の隙より覗きて見れば、裾は露、袖は涙に打萎れつゝ、少し面瘦せたる顔ばせ、まことに尋ねかねたる有様、如何なる大道心者も、心弱うなりぬべし。瀧口入道、人を出いて、全くこれには、さる人なし。若し門違にてもや候ふらんと云はせたりければ、横笛、情なう恨めしけれども、力及ばず涙を抑へて歸りけり。

其の後瀧口入道、同宿の僧に語りけるは、これも、世に閑にて、念佛の障碍は候はねども、あかで別れし女に、此の栖を見えて候へば、たとひ一度は心強くとも、又も慕ふ事あらば、心も動き候ひなんす。暇申すとて、嵯峨をば出でて高野へ上り、清淨心院に行ひ澄ましてぞ居たりける。横笛もやがて様を替へぬる由聞えしかば、瀧口入道一首の歌をぞ送りける、

そるまでは恨みしかども梓弓眞の道に入るぞ嬉しき

【清淨心院】高野山大塔から十六町北谷にある寺。

横笛が返事に、

そるとても何か恨みん梓弓引きとむべき心ならねば

其の後 横笛は奈良の法華寺にありけるが、其の思ひの積にや、幾程なくて、遂にはかなくなりけり。瀧口入道、此の由を傳へ聞いて、彌々深う行ひ澄まして居たりければ、父も不孝を宥しけり。親しき者どもも、皆用ひて、高野の聖とぞ申しける。

三位の中將、此の聖に尋ね逢ひて見給ふに、都にありし時は、布衣に立烏帽子、衣文を繕ひ、鬢を撫で、花やかなりし男なり。出家の後は、今日初めて見給ふに、未だ三十にもならざるが、老僧姿に瘦せ衰へ、濃き墨染に同じ袈裟、香の煙に入みかをり、賢しげに思ひ入りたる道心者。羨しうや思はれけん。彼の晋の七賢、漢の四皓が栖みけん、南山、竹林の有様も、これには過ぎじとぞ見えし。

【法華寺】大和添上郡住保村大字法華寺にあつた尼。法華滅罪寺の略稱。總國分尼寺。

【布衣】三八頁

【七賢】晋の竹林七賢。嵇康、阮籍、阮咸、山濤、劉伶、王戎、向秀
【四皓】漢の商山四皓。東園公、綺里季、夏黃公、角里先生。

○高野の巻

瀧口入道、三位の中將を見奉り、こは現とも覺え候はぬものかな。さても八島をば、何としてかは、遁れさせ給ひて候ふやらんと申しければ、三位の中將、さればとよ、都をば人なみくに出でて、西國へ落下りたりしかども、故郷に留め置きたりし少き者どもが面影のみ、身にひしと立添ひて、忘るゝ隙もなかりしかば、其の物思ふ心や、云はぬにしろくや見えけん、大臣殿も二位殿も、此の人は、池の大納言の様に、頼朝に心を通はして二心ありなんと、思ひ隔て給ふ間、いとど心留らで、これまであくがれ出でたんなり。これにて出家して、火の中水の底へも入りなばやとは思へども、但し、熊野へ参りたき宿願ありと宣へば、瀧口入道申しけるは、夢幻の世の中は、とてもかくても候ひなんす。只永き世の闇こそ、心憂かるべう候へとぞ申しける。やがて、此の瀧口入道を先達にて、堂塔巡禮して、奥の院へぞ参られける。

【池の大納言】清盛の弟頼盛、一門都落を裏切つて、鎌倉に下つて頼朝の歡待をうけた。

○維盛の出家

【雪山の鳥】寒苦鳥。天竺雪山に栖む。夜は寒苦に泣いて、夜が明けたら巢を作らうと鳴くが、日が出ると暖さに夜の苦を忘れ、今日死ぬか明日死ぬか知らぬ身の何とて無常の身を安くしようかと云つて巢を作らずといふ鳥。

【後夜晨朝】念佛誦經は晝は晨朝、日中黄昏、夜は初夜、中夜、後夜の六時に、行ふを本式とす。

【東禪院】高野山南谷にある寺。

【如何にもなる】死ぬの意。

維盛が身のいつとなく、雪山の鳥の鳴くらんやうに、今日よ明日よと思ふ事をとて、涙ぐみ給ふぞ哀れなる、潮風に黒み、盡きせぬ物思ひに瘦せ衰へて、其の人とは見え給はねども、なほ世の人には勝れ給へり。其の夜は、瀧口入道が庵室に歸つて、昔今の物語どもし給ひけり。更け行く儘に、聖が行儀を見給へば、至極甚深の床の上には、眞理の玉を瑩くらんと見えて、後夜晨朝の鐘の聲には、生死の眠を覺すらんとも覺えたり。遁れぬべくば、かくてもあらまほしうやはれけん。

明けければ、東禪院の知覺上人と申す聖を請じ奉つて、出家せんとし給ひけるが、與三兵衛重景・石童丸を召して宣ひけるは、維盛こそ、人知れぬ思ひを身に添へながら、道狭う遁れ難き身なれば、如何にもなると云ふとも、汝等は命を捨つべからず。此の頃は世にある人こそ多けれ。我れ如何にもなりなん後、急ぎ都へ上つて、各々が身をも助け、且は

【故殿】重盛。
【鎌田兵衛】鎌田兵衛尉正清。
【悪源太】源義朝の子。頼朝の兄義平。

【故大臣殿】重盛。

【君の御元服】維盛の元服をさす。

【五代】維盛の功名であらう。維盛の子を六代といふ。

【忌五十日】出産の穢を避け慎む産後五十日。

【ようて云々】ようてはよくての音便。よく死んでくれたの意。

【同隸】七二頁

妻子をも育み、且は維盛が後世をも弔へかすと宣へ、ば二人の者ども、涙に咽び俯して、暫はとかうの御返事にも及ばず。やゝあつて、重景涙を抑へて申しけるは、重景が父與三左衛門景康は、平治の逆亂の時、故殿の御供に候ひて、二條堀河の邊にて、鎌田兵衛と組んで、悪源太に討たれ候ひぬ。重景も、なじかは劣り候ふべきなれども、其の時は未だ二歳になり候へば、少しも覺え候はず。母には七歳にて後れ候ひぬ。情を懸くべき親しき者一人も候はざりしに、故大臣殿、御憐み候うて、あれは、我が命に代りたりし者の子なればとて、朝夕御前にて養育てられ参らせて、生年九つと申しし時、君の御元服候ひし夜、忝くも頭を取上げられ参らせて、盛の字は家の字なれば、五代につく。重の字をば松王にと仰せられて、重景とは召され参らせけるなり。其上、童名を松王と申しける事も、生れて忌五十日と申すに、父が抱いて参りたりしかば、此の家を小松といへば、祝うてつくるなりと仰せられて、松王とは付けられ参らせて候ひけるなり。父がようて死にけるも、我が身の冥加と覺え候。随分同隸どもにも、芳心せられてこそ罷り過ぎ候ひしか。されば、

【靱負の尉】衛門尉をいふ。衛門府の官人は宮城門を警衛し行幸に供奉する武官で靱を負ひ弓を持つ故にゆげひのつかさといふ。

御臨終の御時も、此の世の中の事をば、思し召し捨てて、一事も仰せられざりしに、重景を御前へ召して、あな無慚、汝は重盛を父が形見と思ひ、重盛は汝を景康が形見と思ひてこそ過しつれ。今度の除目に靱負尉になして、父景康を呼びし様に召さばやとこそ、思し召しつるに、空しうなるこそ悲しけれ。相構へて、少將殿の御心にばし違ひ参らすなとこそ、仰せ候ひしか。日來は、自然の事も候はば、先づ眞前に命を奉らうとこそ存じ候ひしに、見捨て参らせて落つべき者と、思し召され候ふ御心の中こそ、恥しう候へ。此の頃は世にある人こそ多けれと、仰せ蒙り候ふは、當時の如くんば、皆源氏の郎等どもこそ候ふらめ。君の神にも佛にもならせ給ひなん後、楽しみ榮え候ふとも、千年の齡を歴るべきか。たとひ萬年を保ち候ふとも、竟には終のなかるべきかは。これに過ぎたる善知識、何事か候ふべきとて、手づから髻切つて、瀧口入道にぞ剃らせける。石童丸も、これを見て、元結際より髪をきる。これも、八つより付き参らせて、重景にも劣らず不便にし給ひしかば、同じう瀧口入道にぞ剃られける。

【流轉三界中云々】清信士度人經にある偈、戒師が出家得度する者に授ける文。

【様をも替へん】維盛の北の方のことをいふ。

【左中將】維盛の弟清經。一三二頁

【備中守】維盛の弟師盛。一三二頁

【唐皮】一〇〇頁。

【小鳥】もと源氏重代の

これ等が、先立つてかやうになるを見給ふに付けても、いと心細うぞなられける。哀れ、如何にもして、替らぬ姿を、今一度戀しき者どもに、見えて後、かくならば、思ふ事あらじと宣ひけるこそ、せめての事なれ。さてしもあるべき事ならねば、流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者と三反唱へ給ひて、終に剃下させ給ひてけり。三位。中將と與三兵衛は、同年にて今年は廿七歳なり。石童丸は十八にぞなりにける。

やゝあつて、舍人武里を召して、あなかしこ、汝はこれより都へは上るべからず。その故は、終には隠れあるまじけれども、正しう此の有様を聞いては、やがて様をも替へんすらんと覺ゆるぞ。只、これより八島へ参つて、人々に申さんする事はよな、且つ御覽じ候ひし様に、大方の世間も物變く、あぢきなさも萬づ數添ひて覺えし程に、人々にかくとも知らせ参らせずして、かやうに罷りなり候ひぬる事は、西國にて左中將失せ候ひぬ、一谷にて備中守討たれ候ひぬ、維盛さへかやうになり候へば、如何に各々の便なう思し召され候はんずらんと、そのみこそ心苦しう候へ。抑、唐皮と云ふ鎧、小鳥と云ふ太刀は、

寶刀で義朝亡びて平家累代の實となつた太刀。

【善知識の爲】善智識たらしめる爲。菩提心に住せしめ善根を生ぜしめ諸波羅密を行せしめ我を善に導く者たらしめる爲。二五頁

【三つの御山】熊野三山。本宮新宮那智の三所権現。

【濱の宮】紀伊東牟婁郡那智村濱之宮の王子権現。

【山なりの島】盛衰記「遙の沖に小島あり、金鳥とぞ申しける」濱の宮村の南方にある島。【名跡】名籍。

平將軍貞盛より以來、當家に傳へて、維盛までは嫡々九代に相當る。此の後、若し運命開けて、都へ歸り上らせ給ふ事も候はば、六代に賜ふべしと申すべしとぞ宣ひける。武里、涙に咽び俯して、暫しは、とかうの御返事にも及ばず。やゝあつて、涙を抑へて申しけるは、何くまでも御供申し、最後の御有様をも見參らせて後こそ、八島へも參らめと申しければ、さらばとて召具せらる。善知識の爲にとて、瀧口入道をも具せられけり。

○維盛の入水

三つの御山の參詣、事故なう遂げ給ひしかば、濱の宮と申し奉る王子の御前より、一葉の船に棹さして、萬里の蒼海に浮び給ふ。遙かの沖に、山なりの島と云ふ所ありき。中將、それに船漕寄せさせ、岸に上り、大きな松の木を削りて、泣く泣く名跡をぞ書付けられる。祖父太政大臣平の朝臣清盛公法名淨海、親父小松の内大臣。左大將重盛公法名淨蓮、三位。中將維盛法名淨圓、年二十七歳、壽永三年三月二十八日、那智の沖にて入水と書付

けて、又舟に乗り、沖へぞ漕出で給ひける。思ひ切りぬる道なれども、今はの時にもなりぬれば、さすが心細う悲しからずと云ふ事なし。

【釣船の浪に】藤原基俊集「さゝ波や比良の山風早からし波間に消ゆるあまの釣船」【今はと】金葉集、春「今はとて越路に歸る雁かねははねもたゆくや行きかゝるらむ」

頃は三月二十八日の事なれば、海路遙かに霞み渡り、哀れを催す類かな。只大方の春だにも、暮れ行く空は物憂きに、況んや、これは今日を最期、只今限りの事なれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣船の、浪に消え入る様に覺ゆるが、さすが沈みも果てぬを見給ふに付けても、御身の上とや思はれけん。おのが一行引連れて、今はと歸る雁の、越路を指して鳴き行くも、故郷へ言傳せまほしく、蘇武が胡國の恨みまで、思ひ残せる限もなし。こはされば、何事ぞや。なほ妄執の盡きぬにこそと思ひ返し、西に向ひ手を合せ、念佛し給ふ心の中にも、さても、都には、今を限とはいかでか知るべきなれば、風の便の音信をも、今やくとこそ待たんすらめと思はれければ、合掌を亂り、念佛を止め、聖に向つて宣ひけるは、哀れ、人の身に、妻子と云ふものをば、持つまじかりけるものかな。今生にて物を思はするのみならず、後世菩提の妨げとなりぬる事こそ口惜しけれ。只今も思ひ出

でたるぞや。かやうの事を心中に残せば、餘りに罪深かんなる間、懺悔するなりとぞ宣ひける。

【生者必滅】一三八頁
【末の露本の雫】新古今集「末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらん」
【驪山宮】唐玄宗楊貴妃と比翼連枝の誓をした宮殿。
【甘泉殿】白氏文集、新樂府、李夫人、漢武帝初喪、李夫人、夫人病時不肯別、死後留得生前恩、君恩不盡念、未已、甘泉殿裏命寫真、丹青寫出竟何益、不言不笑愁殺人。
【松子梅生】赤松子梅福の如き仙人も命に限りあり。
【等覺】佛の異稱。諸佛の覺悟平等一如なる故

聖も、哀れに思ひけれども、我さへ心弱うては、叶はじとや思ひけん、涙押拭ひ、さらぬ體にもてなし、あはれ、高きも賤しきも、恩愛の道は思ひ切られぬ事にて候へば、まこと、さこそは思し召され候ふらめ。中にも夫妻は、五百生の宿縁と承れば、先世の契淺からず候。生者必滅、會者定離は、浮世の習ひにて候ふなり。末の露本の雫の例あれば、たとひ遅速の不同ありと云ふとも、後れ先立つ御別れ、終になくてもや候ふべき。彼の驪山宮の秋の夕べの契りも、終には心を摧く端となり、甘泉殿の生前の恩も終なきにしもあらず。松子梅生、生涯の恨あり、等覺十地、なほ生死の掟に隨ふ。たとひ君長生の樂しみに誇り給ふとも、此の御恨みは終になくてもや候ふべき。たとひ又百年の齡を保たせ給ふとも、此の御別れは、何時も唯同じ事と思し召さるべし。第六天の魔王といふ外道は、欲界の六天を皆我が物と領じて、中にも此の界の衆生の、生死に離るる事を惜しみ、或は

にいふ。
【十地】等覺に到らぬ菩薩の位。歡喜、離苦、發光、徼慧、難勝、現前、遠行、不動、善慧、法雲の十階級。
【第六天の魔王】欲界の頂上第六天。他化自在天、佛道に障礙をなす四魔王の一なる天魔。
【欲界の六天】欲界は諸欲を有する有情の住む處。六天は四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天。

妻となり。或は夫となつて、これを妨げんとするに、三世の諸佛は、一切衆生を一子の如く思し召して、かの極樂淨土の不退の土に勧め入れんとし給ふに、妻子は、無始曠劫より以來、生死に輪廻する細なるが故に、佛は重う戒め給ふなり。

【七寶の塔云々】賢愚經「假使有八人、起七寶塔、高至三十三尺、所得功德、不如出家」
【三十三天】忉利天。欲界の第二天で須彌山頂上。帝釋天を中央に四方に各八天ある。
【百羅漢云々】摩訶阿僧祇律「若人百千歲供養百羅漢、不如一夜中出家修梵行」
【申し候はんや】況やを鄭重に云たもの。

さればとて、御心弱う思し召すべからず。源氏の先祖伊豫入道賴義は、勅命によつて、奥州の夷安倍の貞任・宗任を攻め給ひし時、十二年が間に人の頸を斬ること、一萬六千餘人なり。其の外山野の獸、江河の鱗、其の命を絶つ事、幾千萬と云ふ數を知らず。されども終焉の時、一念の菩提心を發せしによつて、往生の素懷を遂げたりとこそ承れ。なかなづく、御出家の功德莫大なれば、先世の罪障は皆亡び給ひぬらん。若し人あつて、七寶の塔を立てん事、高さ三十三天に至ると云ふとも、一日の出家の功德には及ぶべからず。又人あつて、百千歳が間、百羅漢を供養したらんするよりも、一日の出家の功德には及ばずとこそ説かれたれ。罪深かりし賴義も、心猛きが故に、往生を遂ぐ。申し候はんや、君はさせる御罪業もましまさざらんに、などか、淨土へ參らせ給はでは候ふべき。

【那由多恒河沙】那由多
は千萬億、恒河沙は恒
河の沙の如き多数。

【還來穢國度人天】法事
讚「誓到彌陀安養界」
還來穢國一度人天」
【善知識】二五頁。一九
六頁。

其の上當山權現は、本地阿彌陀如來にておはします。一々の誓願、衆生化度の願ならず
と云ふ事なし。中にも第十八の願に設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、
若不生者、不取正覺と説かれたれば、一念十念の頼みあり。只此の教を深く信じて、ゆめ
ゆめ疑をなすべからず。無二の懇念を致して、若しは一遍も、若しは十遍も唱へ給ふもの
ならば、彌陀如來、六十萬億那由多恒河沙の御身を縮め、丈六八尺の御形にて、觀音勢
至、無數の聖衆、化佛菩薩、百重千重に圍遶し、伎樂歌詠じて、只今極樂の東門を出でて
來迎し給はんすれば、御身こそ蒼海の底に沈むと思し召さるとも、紫雲の上のぼり給ふ
べし。成佛得脱して、悟を開き給ひなば、娑婆の故郷に立歸つて、妻子を導き給はん事、
還來穢國度人天、少しも過ち給ふべからずとて、頻に鐘打鳴し、念佛を勧め奉れば、中將
も、然るべき善知識と思し召し、忽に妄念を翻し、西に向ひ手を合せ、高聲に念佛百返ば
かり唱へ給ひて、南無と唱ふる聲共に、海にぞ飛入り給ひける。與三兵衛・石童丸も、同じ
う御名を唱へつゝ、續いて海にぞ沈みける。(維盛入水)

【孝養】後世菩提を弔ふ
こと。
【檀特山】印度健駄邏國
の山。悉達太子出家剃
髮の處といふ。
【車匿舍人】悉達太子の
僕。太子出城の時馬の
口を取り檀特山の麓で
馬を引いて歸つた。
【金泥駒】悉達太子出城
の時の馬。健陟(ケン
ダカ)。
【と渡る船】伊勢物語
「わが上に露をおくな
る天の川と渡る船の權
の雫か」

【新三位中將】維盛の弟
資盛。二七頁。
【人】ここでは維盛をさ
していふ。

舍人武里も、續いて海に入らんとしけるを、聖、取留め、泣く／＼教訓しけるは、如何
に、うたてくも、君の御遺言をば違へ参らせんとはするぞ。下藤こそ、なほもうたてけれ。
今は如何にもして存へて、御菩提を弔ひ参らせよと云ひければ、後れ奉つたる悲しさに、
後の御孝養の事も覺えずとて、船底に倒れ伏し、喚き叫びし有様は、昔悉達太子の檀特山
へ入らせ給ひし時、車匿舍人が、金泥駒を賜はつて、王宮に還りし悲しびも、これには過
ぎじとぞ見えし。浮きもや上り給ふと、暫しは船を推廻して見けれども、三人共に深く沈
んで見え給はず。いつしか經讀み念佛して、廻向しけるこそ哀れなれ。さる程に、夕陽西
に傾いて、海上も闇くなりければ、名残は盡きせず思へども、さてしもあるべき事ならね
ば、空しき船を漕歸る。と渡る船の權の雫、聖が袖より傳ふ涙、わきて何れも見えざりけ
り。聖は高野へ歸り上り、武里は泣く／＼八島へ参りけり。
御弟新三位の中將殿に、御文取出いて奉る。これを開けて見給ひて、あな心憂や、我が思
ひ奉る程、人は思ひ給はざりける事よ。さらば、引具して一所にも沈み果て給はで、所々

【左の中將】維盛の弟清經。一三二頁。
【備中守殿】維盛の弟師盛。一三二頁。

【唐皮、小鳥】一〇〇頁、

【故三位殿】維盛。

【池の大納言】清盛の弟頼盛。一門都落を脱け、鎌倉へ行つて頼朝にもてなされた。一三六頁。

に臥さん事こそ悲しけれ。大臣殿も二位殿も、頼朝に心を通はして、都へこそおはしたるらめとて、我等にも心を置き給ひしに、さては那智の沖にて、御身を投げてまし／＼けるごさんなれ。さて、御詞にて仰せられし事はなきかと宣へば、御詞で申せと仰せ候ひしは、且つ御覽じ候ひし様に、大方の世間も物憂く、あぢきなさも萬づ數添ひて覚えさせまし／＼候ふ程に、人々にも知らせ参らせずして、かやうにならせ給ふ御事は、西國にて左の中將殿失せさせ給ひ候ひぬ、一谷にて、備中の守の殿討たれさせまし／＼候ひぬ、御身さへ、かやうにならせまし／＼候へば、如何に各々の便なう思し召され候ふらんと、只これのみこそ、御心苦しう仰せられ候ひつれ。唐皮・小鳥の事まで細々と語り申したりければ、新三位の中將殿。今は我が身とても、存ふべしとも覚えぬものをと、袖を顔に推當てて、さめざめとぞ泣かれける。故三位殿に痛く似参らせ給ひたりしかば、これを見る侍どもも、さし集ひて袖をぞ濡しける。大臣殿も二位殿も、此の人は、池の大納言の様に、頼朝に心を通はして、都へこそおはしたるらめなど、思ひ居たれば、さはおはせざりしかとて、今更また悶え焦れ給ひけり。(三日平氏)

さる程に、小松の三位の中將維盛の卿の北の方は、風の便の音信も絶えて久しくなりければ、月に一度などは、必ず音信るゝものと思ひて待たれけれども、春過ぎ、夏にもなりぬ。三位の中將、今は八島にもおはせぬものをなんと、申す者ありと聞き給ひて、北方、餘りの覺束なさに、とかうして、使を一人仕立てて、八島へ遣されたりけれども、使やがて立ちも歸らず。夏闌け、秋にもなりぬ。七月の末に、かの使還り参りたり。北方、さて如何にやと問ひ給へば、過ぎ候ひし三月十五日の曉、與三兵衛重景・石童丸ばかり御供にて、讃岐の八島の館をば御出あつて、高野の御山へ参らせ給ひて、御出家させおはしまし、其の後熊野へ参らせ給ひて、那智の沖にて、御身を投げてまし／＼候ふところ、御供申したりし舍人武里は、申し候ひつれと申しければ、北方、さればこそ、恠しと思ひたればとて、引被いてぞ伏し給ふ。若君姫君も、聲々に喚き叫び給ひけり。

【本三位の中將殿】一谷の戦に生田森で捕虜になつた重衡。

若君の乳母の女房、涙を抑へて申しけるは、これは今更歎かせ給ふべからず。本三位。

中將殿の様に、生きながら囚はれて、京鎌倉に恥を曝させ給ひなば、如何ばかり心變う侍ふべきに、これは、高野の御山へ参らせ給ひて、御出家せさせおはしまし、其の後熊野へ参らせ給ひて、後世の御事よく／＼申させ給ひて、那智の沖とかやにて、御身を投げましまし侍ふ事こそ、歎きの中の御悦びにては侍へ。今は如何にもして、御様をかへ、佛の御名を唱へさせ給ひて、亡き人の御菩提を弔ひ参らせ給へかすと申しければ、北の方、やがて様を替へ、彼の後世菩提を弔ひ給ふぞ、哀れなる。

鎌倉殿、此の由を傳へ聞き給ひて、あはれ、隔てなう打向ひてもおはしたらば、さりともし、命ばかりをば助け奉つてまし。其の故は、故池の禪尼の使として、頼朝流罪に宥められる事は、偏にかの内府の芳恩なり。其の名残にておはすれば、子息たちをも全く疎に思ひ奉らず。況して、さやうに出家などせられなん上は、子細にや及ぶべきとぞ宣ひける。

(藤戸)

【故池の禪尼】一三七頁故池殿。

【内府】維盛の父重盛。

卷第十一

○那須の與一

さる程に、阿波讃岐に、平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺この洞より、十四五騎二十騎、打連れ／＼馳せ來たる程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く處に、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横様になす。あれは如何にと見る處に、船の中より、年の齡十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に、紅の袴著たるが、皆紅の扇の、日出したるを、船のせがいに挟みて立て、陸へ向いてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何にと宣へば、射よとにこそ候ふらめ。但し大將車の矢面に進んで、傾城を御覽ぜられん處を、手垂に狙うて射落せとの謀とこそ存じ

【段】一段は六間。

【柳の五衣】柳は襲ねの色目で表白裏青。五衣は表著の下に同色の衣を五枚重ね著ること。下に紅單を著る。【せがい】舟柁(ふなだな)。舷に沿うて縁のやうに渡してある板。【手垂】熟練してゐること。熟練した人。

候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらんと申しければ、判官、御方に射つべき仁は、誰かあると問ひ給へば、手垂ども多う候ふ中に、下野の國の住人、那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候と申す。判官、證據があるか。さん候、かけ鳥などを争うて、三つに二つは、必ず射落し候と申しければ、判官、さらば、與一呼べとて召されけり。

【裾に赤地の錦云々】濃紺色の直垂で、そのおくみと端袖を赤地錦で色どつたもの。端袖は袖(二幅半)の袖口の方の半幅。
【足白の太刀】足(帶取を通すために鞘についた金具)を銀で造つた太刀。
【薄截生】切斑の黒の薄色なもの。一二七頁。
【ぬための鎧】鹿角の波状の模様あるもので造つた鎧、その鎧をつけた矢。
【仕つとも】仕りつとも

與一其の頃は、未だ二十ばかりの男なり。裾に、赤地の錦を以て衽・端袖いろへたる直垂に、萌葱織の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割合せて作いだりける、ぬための鎧をぞ指し添へたる。滋藤の弓脇に挟み、甲をば脱いで高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、如何に與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかしと宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損するものならば、永き御方の御弓筋の疵にて候ふべし。一定仕らうする仁に、仰せ付けらるべうもや候ふらんと申しければ、判官、大に怒つて、今度鎌倉を立つて、西國へ向はんする者どもは、皆義經が

【それに】それであるのに。然るに。それなのに。

【まろほや摺つたる】まろほやの紋章を青貝摺にした。まろほやは紋章の一。ほや(寄生木又海鞘だともいふ)を圓形に意匠したもの。
【金覆輪の鞍】一〇一頁

下知を背くべからず。それに、少しも子細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へ歸らるべしとぞ宣ひける。與一、重ねて辭せばありなんとや思ひけん、さ候はば、はづれんをば存じ候はず、御説で候へば、仕つてこそ見候はめとて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う遅しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。御方の兵ども、與一が後を遙かに見送つて、此の若者一定仕らうすると覺え候と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入れたりけれども、なほ扇の間は、七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の尅ばかりの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船は揺り上げ揺り居る漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には、平家船を一面に並べて見物す。陸には、源氏轡を並べてこれを見る。何れもく、晴ならずと云ふ事なし。與一、目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現・宇都の宮・那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の眞中

【我が國の神明】與一の生國下野國の神。

【日光權現】下野日光二荒山三所神社。
 【宇都宮】下野國の一の宮。二荒山神社。
 【那須の湯泉大明神】下野那須郡湯本村温泉神社。

【中差】箆に差した矢の上差の鎗矢の次にさしたる矢。

射させて賜はせ給へ。これを射損するものならば、弓切折り自害して、人に二度面を向ふべからず。今一度、本國へ歸さんと思し召さば、此の矢はづさせ給ふなど、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鎗を取つてつがひ、よつ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏せ、弓は強し、鎗は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎗は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゝやくに、白波の上に漾ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、中には、平家絃を扣いて感じたり、陸には、源氏箆を扣いてどよめきけり。(那須與一) 餘りの面白さに、感に堪へずや思ひけん、船の中より、年の齡五十ばかりなる男の、黒革絨の鎧著たるが、白柄の長刀杖につき、扇立てたる所に立つて、舞ひ澄ましたり。伊勢三郎義盛、與一が後に歩ませ寄つて、御説であるぞ、これをも又仕れと云ひければ、與一今度は中差取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。舞ひ澄ましたる男の眞たゞ中を、ひや

うつばと射て、船底へ眞倒に射倒す。あゝ射たりと云ふ者もあり、いや／＼情なしと云ふ者も多かりけり。平家の方には、靜まり返つて音もせず。源氏は、又箆を扣いてどよめきけり。(弓流)

○能登殿最期

【致盛】清盛の異母弟。
 【經盛】一六八頁。
 【小松新三位中將資盛】二七頁。
 【少將有盛】一三二頁。
 【行盛】重盛の弟基盛の子。
 【大臣殿父子】平宗盛と其子右衛門督清宗。

さる程に、門脇の平中納言致盛・修理大夫經盛、兄弟手に手を取組み、鎧の上に碇を負うて、海にぞ沈み給ひける。小松新三位の中將資盛・同じき少將有盛・從弟の左馬頭行盛も、手に手を取組み、これも鎧の上に碇を負うて、一所に海にぞ入り給ふ。人々はかやうにし給へども、大臣殿父子は、さもし給はず、絃に立ち、四方見廻しておはしければ、平家の侍ども、餘りの心憂さに、傍をつと走り通る様にて、先づ、大臣殿を海へがばと突入れ奉る。これを見て、右衛門督、やがて續いて飛入り給ひぬ。人々は、鎧の上に重き物を負うたり抱いたりして入ればこそ沈め、此の人親子は、さもし給はず、慙に水練の

上手にておはしければ、大臣殿は、右衛門の督沈まば、我も沈まん、助からば、我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして、彼方此方へ泳ぎありき給ひけをるを、伊勢の三郎義盛、小船をつと漕ぎ寄せて、先づ右衛門の督を、熊手に懸けて引上げ奉る。大臣殿、いとど沈みもやり給はざりしを、一所に取上げ奉つてげり。乳母子の飛彈の三郎左衛門景經、此の由を見奉つて、我が君取り奉るは何者ぞとて、小舟に乗り、義盛が船に押雙べて乗移り、太刀を抜いて打つてかかる。義盛あぶなう見えける所に、義盛が童、主を討たせじと中に隔たり、三郎左衛門に打つてかゝる。三郎左衛門が打つ太刀に、義盛が童、甲の眞向打破られて、二の太刀に頸打落さる。義盛なほあぶなう見えけるを、隣の船より、堀の彌太郎親經、よつ引いてひやうと放つ。三郎左衛門、内甲を射させてひるむ處に、堀の彌太郎、義盛が船に乗遷り、三郎左衛門に組んで伏す。堀が郎等、やがて續いて乗移り、三郎左衛門が腰の刀を抜き、鎧の草摺引上げて、掴む拳も通れくと三刀刺いて、頸を取る。大臣殿は、乳母子が目の前にて、かやうになるを見給ひて、如何ばかりの事をか思は

れけん。

【能登殿】門脇宰相平教盛の子。通盛の弟。能登守教經。
【唐綾緘】唐綾を細く疊んで緘した鎧。
【鉞形】一二六頁
【いか物作】八〇頁
【截生】一二七頁
【滋藤】九三頁
【黒漆の太刀】鞘が黒漆塗で無文、赤銅金具の拵への太刀。

【組めごさんなれ】組めとにこそあるなれ。

凡そ、能登殿の矢先に廻る者こそなかりけれ。教經は、今日を最期とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧著て、鉞形打つたる甲の緒を締め、いか物作りの太刀を帯き、廿四差いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓持つて、指つめ引つめ散々に射給へば、者ども多く手負ひ射殺さる。矢種皆盡きければ、黒漆の大太刀、白柄の大長刀、左右に持つて、さんざんに雉いで廻り給ふ。新中納言知盛の卿、能登殿の許へ使者を立てて、痛う罪な作り給ひそ。さりとはよき敵かはと宣へば、能登殿、さては大将に組めごさんなれとて、打物莖短に取り、鱸舳にさんくんに雉ぎ廻り給ふ。されども、判官を見知り給はねば、物の具のよき武者をば判官かと、目を懸けて飛んで懸る。判官も、内々表に立つ様にはし給へども、とかう違へて、能登殿には組まれます。されども、如何はし給ひたりけん、判官の船に乗りあたり、あはやと、目を懸けて飛んでかゝる。判官、叶はじとや思はれけん、長刀をば弓手の脇にかい挟み、御方の船の、二丈ばかり退きたりけるに、ゆらりと飛乗り給ひぬ。能

登殿、早業はやわざや劣おとられたりけん、續つづいても飛び給はず。能登殿、今はかうとや思はれけん、太刀長刀をも海へ投入れ、甲も脱いで捨てられけり。鎧よろいの袖・草摺くさずりをも撥かきり捨て、胴たねばかり著おほて大童おほむらこになり、大手をひろげて、船の屋形に立出で、大音聲だいおんせいを揚げて、源氏の方に我と思はん者あらば、寄つて、教經組んで生捕にせよ。鎌倉へ下り、兵衛べいゑの佐に物一言ひつしご云はんと思ふなり。寄れや寄れと宣へども、寄る者一人もなかりけり。

【安藝】土佐安藝郡安藝
【大領】郡司。

こゝに、土佐の國の住人、安藝あきの郷ごうを知行しける安藝の大領實康だいろふが子に、安藝の太郎實光とて、凡そ二三十人が力顯したる大力だいちからの剛かうの者、我にちつとも劣らぬ郎等一人具したりけり。弟あとうの次郎も、普通には勝れたる兵なり。彼等三人寄り合ひて、たとひ能登殿、心こそ剛におはすとも、何程の事かあるべき。長十丈たけの鬼なりとも、我等三人が摺つみ付いたらんに、などか従へざるべきとて、小舟に乗り、能登殿の船に押雙べて乗移り、太刀の鋒きつさきを調へて、一面に打つて懸る。能登殿、これを見給ひて、先づ眞前まっさきに進んだる安藝の太郎が郎等に裾を合せて、海へどうど蹴入れ給ふ。續つづいてかゝる安藝の太郎をば、弓手の脇にかい袂

み、弟の次郎をば、馬手の脇に取つて袂ひとしめめて、いざうれ、おのれ等、死出の山の供せよとて、生年廿六にて、海へつゝとぞ入り給ふ。

卷第十二

○六代斬られ

【六代】一三〇頁。

さる程に、六代御前、漸々生立ち給ふ程に、十四五にもなり給へば、いと眉目容厳しく、傍も照輝くばかりなり。母上、これを見給ひて、世の世にてあらましかば、當時は近衛司にてあらんずるものと、宣ひけるこそ餘りの事なれ。

【近衛司】近衛府の官。維盛は十一歳右近權少將、二十一歳權中將。

鎌倉殿、便宜毎に、高尾の聖の許へ、さても、預け奉つし小松。三位。中將維盛の卿の子息、六代御前は、如何様の人にて候ふやらん。昔頼朝を相し給ひし様に、朝の怨敵をも平げ、父の恥をも雪むべき程の仁やらんと申されければ、文覺房の返事に、これは一向底もなき不覺仁にて候ふぞ。御心安く思し召され候へと申されけれども、鎌倉殿、なほも心ゆかずにて、謀叛起さば、やがて方入すべき聖の御坊なり。さりながらも、頼朝一期が間

【善知識】二五頁。一九六頁。
【御出家御臨終云々】父維盛の出家臨終の有様
【濱の宮】紀伊東牟婁郡那智村濱の宮の王子權現。
【山鳴の鳥】濱の宮の南方にある鳥。

は、誰か傾くべき、子孫の末は知らずと宣ひけるこそ怖しけれ。母上、此の由を聞き給ひて、如何にや六代御前、早々出家し給へとありしかば、生年十六と申しし文治五年春の頃、さしも嚴しき御髪を肩の廻に鉢みおろし、柿の衣・柿の袴・笈など用意して、やがて、修行にこそ出でられけれ。齋藤五・齋藤六も、同じ様に出で立つて、御供にぞ参りける。先づ高野へ上り、善知識し給ひける瀧口入道に尋ね逢ひ、御出家の様、御臨終の有様、委しう尋ね問ひ、且は其の跡も懐しとて、熊野へこそ参られけれ。濱の宮と申し奉る王子の御前より、父の渡り給ひたりし山鳴の鳥見渡いて、渡らまほしくは思はれけれども、波風向うて叶はねば、力及び給はず眺めやり給ふに、我が父は、何くにか沈み給ひけると、沖より寄する白波にも、問はまほしうぞ思はれける。濱の眞砂も、父の御骨やらんと懐しくて、涙に袖はしをれつゝ、汐汲む海士の衣ならねど、乾く間なくぞ見えられける。渚に一夜逗留し、終夜經讀み念佛して、指の先にて濱の眞砂に佛の姿をかき顯し、明けければ、僧を請じ、作善の功德さながら聖靈にと廻向して、都へ歸り上られけん心の中、推量られ

て哀れなり。

さる程に六代御前は、三位の禪師とて、高尾の奥に行ひ澄ましておはしけるを、鎌倉殿、さる人の子なり、さる者の弟子なり、たとひ頭をば刺り給ふとも、心をばよも刺り給はじとて、召捕つて失ふべき由、鎌倉殿より、公家へ奏聞申されたりければ、やがて安判官資兼に仰せて召捕つて、終に關東へぞ下されける。駿河の國の住人、岡部の權守泰綱に仰せて、相模の國田越河の端にて、終に斬られにけり。十二の年より三十に餘るまで保ちけるは、偏に長谷の觀音の御利生とぞ聞えし。三位の禪師斬られて後、平家は長く絶えにけり。

【田越河】相模三浦郡田越村を流れ逗子の海に注ぐ。
【斬られにけり】参考源平盛衰記によると、六代の斬られたのは建仁三年即ち頼朝薨後四年めである。

灌頂卷

○女院御出家

【吉田】洛東神樂岡の西。長門本には「吉田邊なる野河の御所へ入せ給ふかの御所と申は花山法皇の世を遁させ給ふ時造進せられし御山莊也」

建禮門院は、東山の麓、吉田の邊なる所にぞ、立入らせ給ひける。中納言の法印慶慧と申す奈良法師の坊なりけり。住み荒して年久しうなりければ、庭には草深く、軒には菘茂れり。簾絶え 閨露にて、雨風たまるべうもなし。花は色々匂へども、主と頼む人もなく、月は夜々さし入れども、詠めて明かす主もなし。昔は玉の臺を瑩き、錦の帳に纏はれて、明かし暮させ給ひしが、今はありとしある人にも、皆別れ果てて、あさましげなる朽坊に入らせ給ひけん御心の中、推量られて哀れなり。魚の陸に上れるが如く、鳥の巢を離れたるが如し。さる儘には、憂かりし波の上、船の中の御栖ひも、今は戀しうぞ思し召されける。蒼波路遠し、思ひを西海千里の雲に寄す。白屋苔深くして、涙 東山一庭の月に落つ。

【蒼波路遠し】和漢朗詠集「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲」

灌頂卷 女院御出家

悲しとも云ふはかりなし。

【長樂寺】洛東圓山の東南の山上にある寺。
【幡】梵語波吒迦の譯。群生を應導し魔衆を制するを標示して佛前に垂れ下げる旗の一種。

【皇子御誕生】治承二年十一月十二日安徳天皇御降誕。

かくて、女院は文治元年五月一日の日、御髪おろさせ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿證坊上人印誓とぞ聞えし。御布施には、先帝の御直衣なり。既に今はの時までも召されたりければ、其の御移香も未だ失せず。御形見に御覽せんとて、西國より遙々と都まで持たせ給ひたりしかば、如何ならん世までも、御身を放たじとこそ、思し召されけれども、御布施になりぬべき物のなき上、且はかの御菩提の爲にもとて、泣く／＼取出させおはします。上人、これを賜はつて、何と奏すべき旨もなくして、墨染の袖を顔に押當てて、泣く泣く御所をぞ罷り出でられける。件の御衣をば幡に縫うて、長樂寺の佛前に懸けられけるとぞ聞えし。

女院は、十五にて女御の宣旨を蒙り、十六にて后妃の位に備はり、君王の傍に候はせ給ひて、朝政を進め給ひ、二十二にて皇子御誕生あつて、皇太子に立ち位に即かせ給ひしかば、院號蒙らせ給ひて、建禮門院とぞ申しける。入道相國の御娘なる上、天子の國母にてましま

【御簪付けても】寛永平假名本「御かんざしに付けても」

【壁に背ける残んの燈】白氏文集、新樂府、上陽白髮人「耿々殘燈背壁影」
【上陽人云々】白氏文集、新樂府、上陽白髮人による。文集の自註に「天寶五載已後楊貴妃專寵、後宮人無復進幸矣、六宮有美色者輒置別所、上陽是其一也」
【郭公花橋の云々】新古今集、夏に讀人不知として出づ。第五句底本其他流布本一人ぞ戀しきとあり。今元和片假名活字本に従ふ。

せば、世の重うし奉る事斜ならず。今年は二十九にぞならせましましたしける。桃李の御粧なほ濃やかに、芙蓉の御容も未だ衰へさせ給はねども、翡翠の御簪付けても、何にかは、せさせ給ふべきなれば、遂に御様を替へさせ給ひてげり。浮世を厭ひ、眞の道に入らせ給へども、御歎は更に盡きせず。人々今はかくとて海に沈みし有様、先帝二位殿の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならん世に、忘るべしとも思し召さねば、露の御命の、何しに今まで存へて、かゝる憂き目を見るらんとて、御涙塞きあへさせ給はず。五月の短夜なれども、明かしかねさせ給ひつゝ、自ら打目睡ませ給はねば、昔の事をば夢にだにも御覽せず。壁に背ける残んの燈の影幽かに、終夜窓打つ暗き雨の音ぞ冷しかりける。上陽人が上陽宮に閉ぢられたりけん悲しみも、これには過ぎじとぞ見えし。昔を忍ぶつまとなれとてや、故の主の移し植ゑ置きたりけん、花橋の風なつかしく、軒近く薫りけるに、山時鳥の、二聲三聲音信れて、通りければ、女院、古き言なれども、思し召しでて、御硯の蓋に、かくぞ遊ばされける、

郭公花たちばなの香をとめて鳴くは昔の人や戀しき

【越前の三位の上】越前守三位通盛の北の方小宰相。

【あるにもあらぬ有様】あらぬ有様といふを強めて云うた。全くかはり果てた有様。

【仙家より歸り云々】和漢朗詠集「謬入仙家」雖爲半日之客恐歸三舊里一纒逢七世之孫劉晨と阮肇が天台山に薬を採り、道を迷うて仙女に逢ひ、半年を過して歸れば、七世の孫の世であつたといふ故事。

【七月九日】元暦二年。八月文治と改元。

【緑衣の監使云々】白氏文集「新樂府」上陽白髮人「上陽人、紅顔開老白髮新、緑衣監使守宮門、一閉上陽多少春」

【隆房卿の北の方】清盛の女、母は八條二位。【信隆卿の北の方】清盛の女、母は八條二位。

【憂き事聞かぬ云々】新古今集「雜、西行」葉せでなほ山深く分け入らむうき事聞かぬ所ありやと

【小原山】山城愛宕郡八瀬村以北の山村の山。【寂光院】山城愛宕郡大原村草生にあり、延暦寺の別所。【山里は物の云々】古今集「雜、讀人知らず」

女房達は、二位殿・越前の三位の上の様に、さのみ猛う水の底にも沈み給はねば、武士の荒けなきに捕られて、舊里に歸り、老いたるも若きも、或は様を替へ、或は形を變し、あるにもあらぬ有様どもにて、思ひもかけぬ谷の底、岩のはざまにてぞ、明かし暮させ給ひける。住まひし宿は、皆煙と立上りにしかば、空しき跡のみ残つて、繁き野邊となりつ、見馴れし人の問ひ來るもなし。仙家より歸つて、七世の孫に逢ひけんも、かくやと覺えて哀なり。

○小原への入御

去んぬる七月九日の日の大地震に、築地も崩れ、荒れたる御所も傾き破れて、いと住ませ給ふべき御便もなし。緑衣の監使、宮門を守るだにもなし。心の儘に荒れたる籬は、茂き野邊よりも露けく、折知りがほに、いつしか蟲の聲々恨むるも哀れなり。さるまゝに、夜も漸く長くなれば、いとど御寢覺がちにて、明かしかねさせ給ひけり。盡きせぬ御

物思に、秋の哀れさへ打添ひて、いとど忍び難うぞ思し召されける。何ごととも皆變り果てぬる浮世なれば、自ら、情を懸け奉るべき昔の草の縁も皆枯れ果てて、誰育み奉るべしとも覺えず。されども、冷泉の大納言隆房の卿の北の方、七條の修理大夫信隆の卿の北の方より、忍びつゝ、常はこと問ひ申されけり。女院、其の昔、あの人どもの育みにてあるべしとは、露も思し召し寄らざりしものをとて、御涙を流させ給ひければ、付き參らせたる女房達も、皆袖をぞ濡されける。

此の御栖ひも、なほ都近くて、玉鉾の道行き人の、人目もしげければ、露の御命の風を待たん程、憂き事聞かぬ深き山の、奥の奥へも入りなばやとは思し召されけれども、さるべき便もまします。或女房の吉田に參つて申しけるは、これより北、小原山の奥、寂光院と申す所こそ、閑に侍へとぞ申しける。女院、山里は、物のさびしき事こそあんなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものをとて、思し召し立たせ給ひけり。御輿などをば信隆・隆房の北の方より、御沙汰ありけるとかや。

「山里は物のさびしき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり」

【成等正覺】等正覺をなすの義。等正覺は梵語三藐三菩提の譯。眞正平等に一切の眞理を覺知する智慧。佛の十號の一。
【頓證菩提】疾速に菩提の妙果を證得すること。

【大納言典侍局】五條大納言邦綱の女輔子。平重衡の妻。安徳天皇の御乳母。
【七重寶樹】七重に列なつて極樂の四方を圍む寶樹。阿彌陀經「極樂國土、七重欄楯、七重寶網、七重行樹、七重寶網、周匝圍繞」皆是。
【八功德水】阿彌陀經「極樂國土、有七寶池、八功德水、充滿其中、一冷、甘美、輕軟、潤澤、清淨、安和、飲無患、飲差四大」の八功德。
【有界】欲界色界無色界の三界。即ち凡夫の生死往來する世界。
【昭陽殿】唐代後宮の殿舎の名。
【長秋宮】漢代後宮の殿舎の名。

灌頂卷 小原への入御

文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがらも、四方の梢の色々なるを、御覽じ過ぎさせ給ふ程に、山陰なればにや、日もやう／＼暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の音すごく、分くる草葉の露しげみ、いとど御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉亂りがはし。空かき曇り、いつしか打時雨れつゝ、鹿の音幽かに音信れて、蟲の恨も絶え絶えなり。とにかくに取集めたる御心細さ、喩へやるべき方もなし。浦傳ひ鳥傳ひせしかども、さすが、かくはなかりしものと、思し召すこそ悲しけれ。岩に苔むして、さびたる所なれば、栖ままほしくぞ思し召す。露結ぶ庭の荻原霜枯れて、籬の菊のかれ／＼に、うつろふ色を御覽じても、御身の上とや思しけん。佛の御前へ參らせ給ひて、天子聖靈成等正覺、一門亡魂頓證菩提と祈り申させ給ひけり。いつの世にも忘れ難きは、先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならん世にも、忘るべしとも思し召さず。さて、寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結んで、一間をば佛所に定め、一間をば御寢所にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛、懈る事なくして、月日を送らせ給ひけり。

かくて神無月中の五日の暮れ方に、庭に散り敷く梢の葉を、もの踏鳴らして聞えければ、女院、世を厭ふ所に、何者の訪ひ來るやらん。あれ見よや。忍ぶべきものならば、急ぎ忍ばんとて見せらるゝに、小鹿の通るにてぞありける。女院、さて如何にや／＼と仰せければ、大納言の典侍の局、涙を抑へて、

岩根ふみ誰かは訪はん梢の葉のそよぐは鹿の渡るなりけり

女院、此の歌餘りに哀れに思し召して、窗の小障子に遊ばし留めさせおはします。

かゝる御徒然の中にも、思し召し準ふ事どもは、つらき中にも數多あり。軒に並べる植樹をば、七重寶樹とかたどれり。岩間に積もる水をば、八功德水と思し召す。無常は、春の花、風に隨つて散り易く、有界は、秋の月、雲に伴つて隠れ易し。昭陽殿に花を翫んじ朝には、風來つて薫を散らし、長秋宮に月を詠せし夕には、雲覆うて光を隠す。昔は玉樓金殿に錦の茵蔕を敷き、妙なりし御住まひなりしかども、今は柴引結ぶ草の庵、餘所の袂もしをれけり。

○小原御幸

【法皇】後白河法皇。
 【北祭】賀茂祭。
 【德大寺】左大臣實定。
 右大臣公能の子。
 【花山院】左大臣兼雅。
 忠雅の子。
 【土御門】權中納言源通親。
 【清原深養父】豐前介房則の子。延長年間内藏大允從五位。その詠古今集に出づ。
 【補陀樂寺】山城愛宕郡大原の西靜原へ半里許の山麓がその舊址。
 【小野皇太后宮】藤原教通の三女。後冷泉天皇の中宮散子。後宮を出で兄の僧靜圓の小野の山坊に入り、後皇太后となり落飾せられた。その舊跡愛宕郡靜野村市原と傳ふ。

かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御栖まひ、御覽せまほしう思し召されけれども、二月彌生の程は、嵐烈しう餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて、小原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、德大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原の深養父が補陀樂寺、小野皇太后宮の舊跡、觀覽あつて、其れより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるる。

頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが未を分き入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽し馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も、思し召し知られて哀れなり。西の山

【青葉交りの遅櫻】金葉集、夏、藤原盛方、夏山の青葉まじりの遅櫻初花よりも珍らしきかな

【池水に汀の】千載集、春に出づ、その詞書に「みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりける比、池上の花」といへる心を讀ませ給うける、院御製

【瓢箪屢々空し云々】和漢朗詠集「瓢箪屢々空し草滋三淵之巷、藜藿深鎖、雨濕三原憲之樞こ

の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水木立、由ある様の所なり。蔓破れては霧不斷の香を焼き、屏落ちては月常住の燭を挑ぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草、浪に漾ひ、錦を曝すかと認たる。中島の松にかゝれる藤波の、末紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶え間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを觀覽あつて、かくぞ遊ばされける、

池水に汀の櫻散り布きて浪の花こそ盛なりければ、舊りにける岩の絶え間より落ち來る水の音さへ、故び、由ある所なり。緑羅の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。

さて、女院の御庵室を觀覽あるに、軒には葛朝顔這ひかゝり、葱交りの萱草、瓢箪屢々空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも謂つつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。

後は山、前は野邊、いざさ小篠に風噪ぎ、世に立たぬ身の習ひとて、憂き節滋き竹柱、都
の方の言傳は、間遠に結へるませ垣や、僅にこと問ふものとは、嶺に木傳ふ猿の聲、賤
が爪木の斧の音、これ等が音信ならでは、薛の葛・青葛、來る人稀なる所なり。

法皇、人やある、人やあると召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝあつて、老
い衰へたる尼一人参りたり。女院は何くへ御幸なりぬるぞと仰せければ、此の上の山へ、
花摘みに入らせ給ひて侍ふと申す。さこそ世を厭ふ御習ひと云ひながら、さやうの事に
仕へ奉るべき人もなきにや、御痛はしうこそと仰せければ、此の尼申しけるは、五戒十善の
御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽せられ侍ふにこそ。捨身の行に、なじ
かは御身を惜しませ給ひ侍ふべき。因果經には、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、
見其現在因と説かれたり。過去未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つや／＼御歎ある
べからず。昔悉達太子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木の葉を聯ねて膚を
隠し、嶺に上つて薪を取り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功によつてこそ、遂に成等

【五戒】殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の戒。
【十善】不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不兩舌、不惡口、不綺語、不兩見、不貪欲、不瞋恚、不邪見。

【捨身の行】報恩又は布施のため身を焼き身を棄てること。

【因果經】過去現在因果經。四卷。宋の求那跋陀羅譯。また佛説因果經、一卷、羅什譯。
【伽耶城】迦維衛（カユ

【牛工】城とあるべきかといふ。迦毘羅婆蘇都（カピラパツツ）の略。悉達太子降誕の地。
【成等正覺】二二二頁。

【信西】三三頁。

【阿波内侍】信西の女、後白河院の御乳母子。

【紀伊二位】信西の妻朝子。從二位。紀伊守藤原兼永の女。後白河院の御乳母。

正覺し給ひきとぞ申しける。此の尼の有様を御覽すれば、身には、絹・布の分も見えぬ物を、結び聚めてぞ、著たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思し召して、抑々汝は如何なる者ぞと仰せければ、此の尼、さめ／＼と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝあつて、涙を抑へて、申すに附けて憚り覺え侍へども、故少納入道信西が女阿波の内侍と申す者にて侍ふなり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ侍ひしに、御覽じ忘れさせ給ふに付けても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ侍へとて、袖を顔に押當てて、忍びあへぬ様目も當てられず。法皇、げにも、汝は阿波の内侍にてあるごさんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事に付けても、只夢とのみこそ思し召せとて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にて、申しけりとぞ、各々感じ合はれける。

彼方此方を觀覽あるに、庭の千草露重く籬に倒れ懸りつゝ、外面の小田も水越えて、鴨立つ隙も見え別かず。さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引開けて觀覽ある

【普賢】文殊の智徳證徳に對し普賢は理徳定徳行徳を主とする。文殊は獅子に乗り左に、普賢は白象に乗り右に侍して佛の二脇士である。【善導和尙】唐の光明寺の僧。道綽禪師につき念佛往生を説く。我が國淨土眞宗で七祖の中第五祖とす。【八軸の妙文】法華經一部八卷。

【九帖の御書】盛衰記淨土の御疏九帖。善導和尙撰述の五部九卷。【觀無量壽經疏】四卷。淨土法事讚二卷。觀念法門一卷。往生禮讚一卷。般舟讚一卷。

【淨名居士】維摩羅詰【維摩詰】又は維摩。天竺毘耶離城の居士。釋尊の教化を輔けた法身の菩薩。

【三萬二千の床云々】維摩經不思議品。於是維摩詰現神通力。即時彼佛遣三萬二千師子座。高廣嚴淨。來入維摩詰室。中略。其室廣博。悉容三萬二千師子之座。無所妨闕。

【大江定基法師】參議齊光の子。三河守。出家して寂昭と云。長保年中入宋。長元七年杭州清涼山々麓に寂園通大師。

【笙歌遙に云々】寶物集七。荒屋無人扶。病起香爐有火向。西眠。笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。十訓抄に「此詩保胤作れりと云々」とあり。

【閻伽】梵語で水をいふ。佛に供へる水。

【一念】一遍の稱名。一聲の念佛。

に、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像。右に善導和尙、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文・九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薫に引替へて、香の煙ぞ立上る。彼の淨名居士の方丈の室の中に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども、色紙に書いて所々に押されたり。其の中に大江定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前とも書かれたり。少し引退けて、女院の御制と覺しくて、

思ひきや深山の奥に栖まひして雲居の月を餘所に見んとは

さて傍を觀覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸けられたり。さしも、本朝漢土の妙なる類敷を盡し、綾羅錦繡の粧ひも、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、親り見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、

岩の懸路を傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇、あれは如何なる者ぞと、仰せければ、老尼、涙を抑へて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて侍ふは、女院にて渡らせ給ひ侍ふ。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍の局と、申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ濡されける。

女院は、世を厭ふ御習ひと云ひながら、今かゝる有様を見え參らせんすらん慚しさよ。消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき。宵 毎の閻伽の水、掬ふ袂もしをるゝに、曉 起の袖の上、山路の露もしげくして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、又御庵室へも入らせおはします。あきれて立たせましゝたる所に、内侍の尼參りつつ花筐をば賜はりけり。(小原御幸)

世を厭ふ御習ひ、何か苦しう侍ふべき。早々御見參あつて、還御なし參らせ侍へと申しければ、女院、御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には、攝取の

【撰取】佛の慈悲の光明
が苦の衆生を舞め救ふ
こと。

光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かなとて、御見参ありけり。(六道)

○御 往 生

【今日も暮れぬと】拾遺
集、哀傷、題不知、讀
人不知、「山寺の入相の
鐘の聲ごとに今日も暮
れぬと聞くぞ悲しき」

さる程に、寂光院の鐘の聲、今日も暮れぬと打知られ、夕陽西に傾けば、御名残は盡きせず思し召されけれども、御涙を抑へて、還御ならせ給ひけり。女院は、いつしか昔をや思し召し出でさせ給ひけん、忍びあへぬ御涙に、袖のしがらみ塞きあへさせ給はず、御後を遙に御覽じ送つて、還御も漸く延びさせ給へば、御庵室に入らせ給ひて、佛の御前に向はせ給ひて、天子聖靈成等正覺、一門亡魂頓證菩提と、祈り申させ給ひけり。昔は、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮・正八幡宮伏拜ませおはしまし、天子實算千秋萬歳とこそ祈り申させ給ひしに、今は引き替へて、西に向はせ給ひて、過去聖靈必ず一佛土へと、祈らせ給ふこそ悲しけれ。

女院は、何時しか、昔戀しうもや思し召されけん、御庵室の御障子に、かうぞ遊ばされける、

この頃はいつ習ひてか我が心大宮人の戀しかるらん

古へも夢になりにし事なれば柴の編戸も久しからじな

又御幸の御供に候はれける、徳大寺の左大將實定公、御庵室の柱に書附けられけるとかや、

古へは月に喩へし君なれど其の光なき深山邊の里

女院は、來し方行く末の、嬉しう、つらかりし事ども、思し召し續けて、御涙に咽ばせ

給ふ折節、山時鳥の、二聲三聲音信れて、通りければ、女院

いざさらば涙くらべん郭公われも憂き世に音をのみぞ鳴く

抑々壇の浦にて、生捕にせられたりける二十餘人の人々、或は首を刎ねて大路を渡され、

或は妻子に別れて遠流せらる。池の大納言の外は、一人も命を生けに都に置かず。四十餘

人の女房達の御事は、何の沙汰にも及ばず。親類に隨ひ、所縁に付いてぞましましける。

【いざさらば云々】續古
今集、雜上、雅成親王
「いざさらば涙くらべ
む郭公われも憂き世に
泣かぬ日はなし」

【池大納言】清盛の弟頼
盛。一三七—一三八頁。

忍ぶ思ひは盡きせねども、さてこそ、歎きながら過されけれ。上は玉の簾の中までも、風閑なる家もなく、下は賤が伏屋の内までも、塵治まれる宿もなし。末を契りし妹背も、雲居の餘所にぞなり果つる。養ひ立てし親子も、行き方知らず別れけり。これは入道相國、上は一人をも恐れず、下は萬民をも顧みず、死罪流刑・解官停任、思ふ様に常に行はれしが致す處なり。されば、父祖の善悪は、必ず子孫に及ぶと云ふ事は、疑なしとぞ見えける。

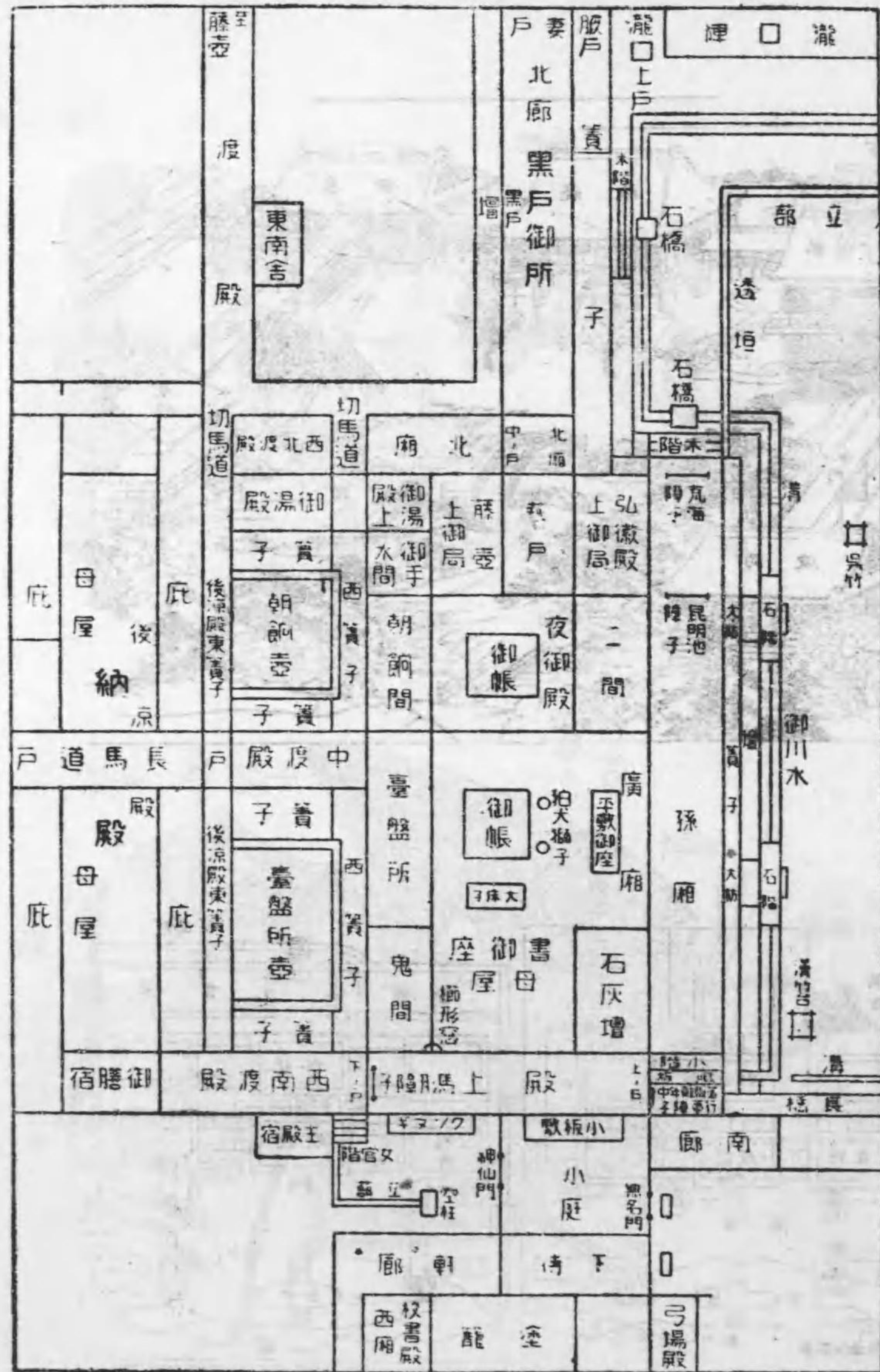
【引接】引攝。

かくて、女院は、空しう年月を送らせ給ふ程に、例ならぬ御心地出で來させ給ひて、打臥させ給ひしが、日來より思し召し設けたる御事なれば、佛の御手に懸けられたりける五色の絲を控へつゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願過ち給はずは、必ず引接し給へとて、御念佛ありしかば、大納言・典侍・局・阿波・内侍、左右に侍ひて、今を限りの御名残の惜しさに、聲々に喚き叫び給けり。御念佛の御聲、漸く弱らせましましければ、西に紫雲變き、異香室に満ちて、音樂空に聞ゆ。限りある御事なれば、建久二年二月中旬に

一期遂に終らせ給ひけり。二人の女房達は、后の宮の御位より附き參らせて、片時も離れ參らせずして候はれしかば、別路の御時も、遣る方なくぞ思はれける。此の女房達は、昔の草の縁も皆枯れ果てて、寄る方もなき身なれども、折々の御佛事營み給ふぞ哀れなる。此の人々も、終には、龍女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如くに、みな往生の素懷を遂げけるとぞ聞えし。

【龍女が正覺】龍宮の婆竭羅龍王の女、八歳で說法を聽聞し、女人の身で佛果を得た（法華經提婆品）
 【韋提希夫人】天竺摩揭陀國頻婆娑羅王の妃。阿闍世太子の爲に牢獄に投ぜられた。のち世尊の說法を聽いて大悟した（觀無量壽經）

流布本平家物語抄 終

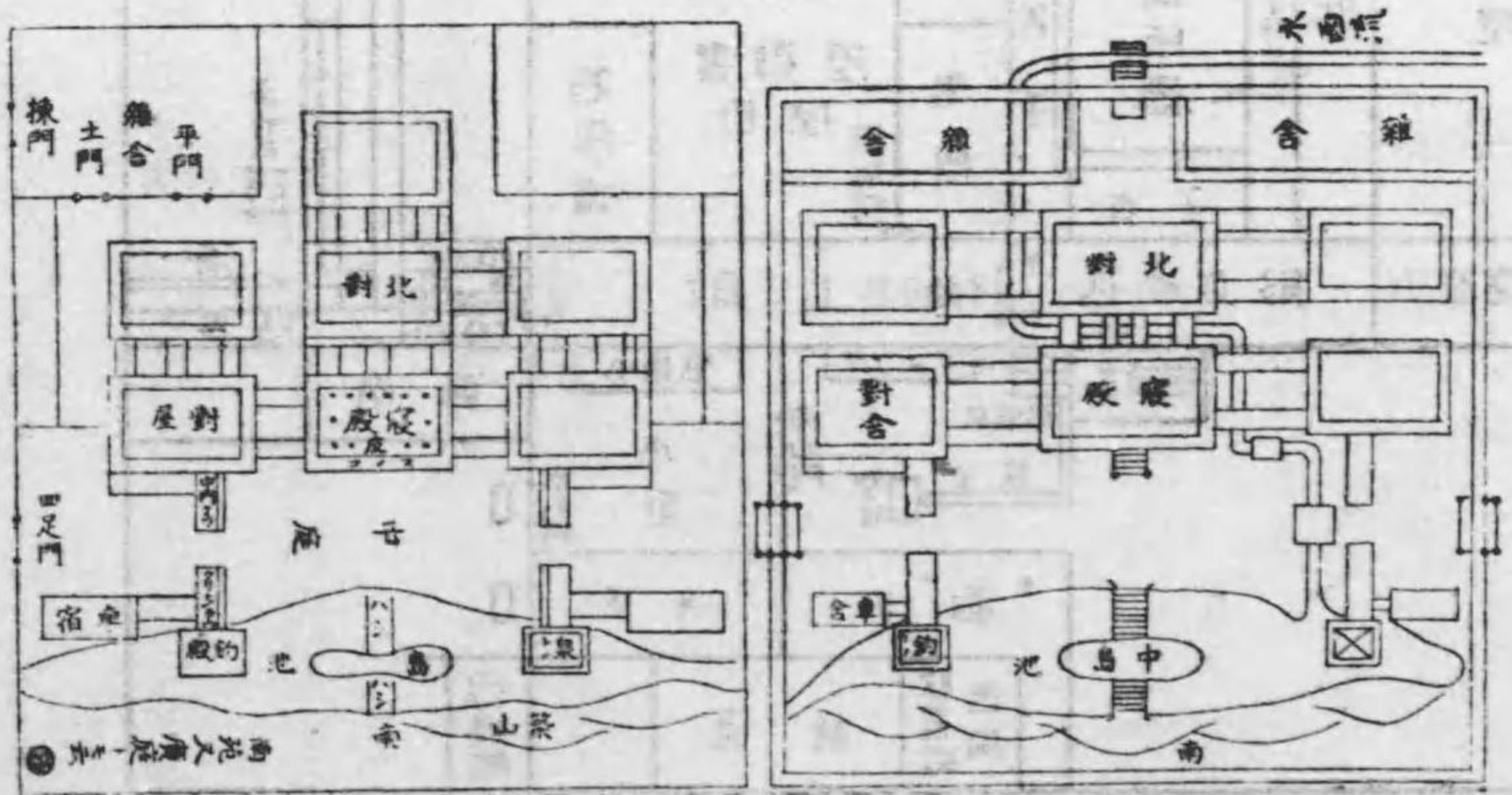


清涼殿圖

(殿舎建築6)

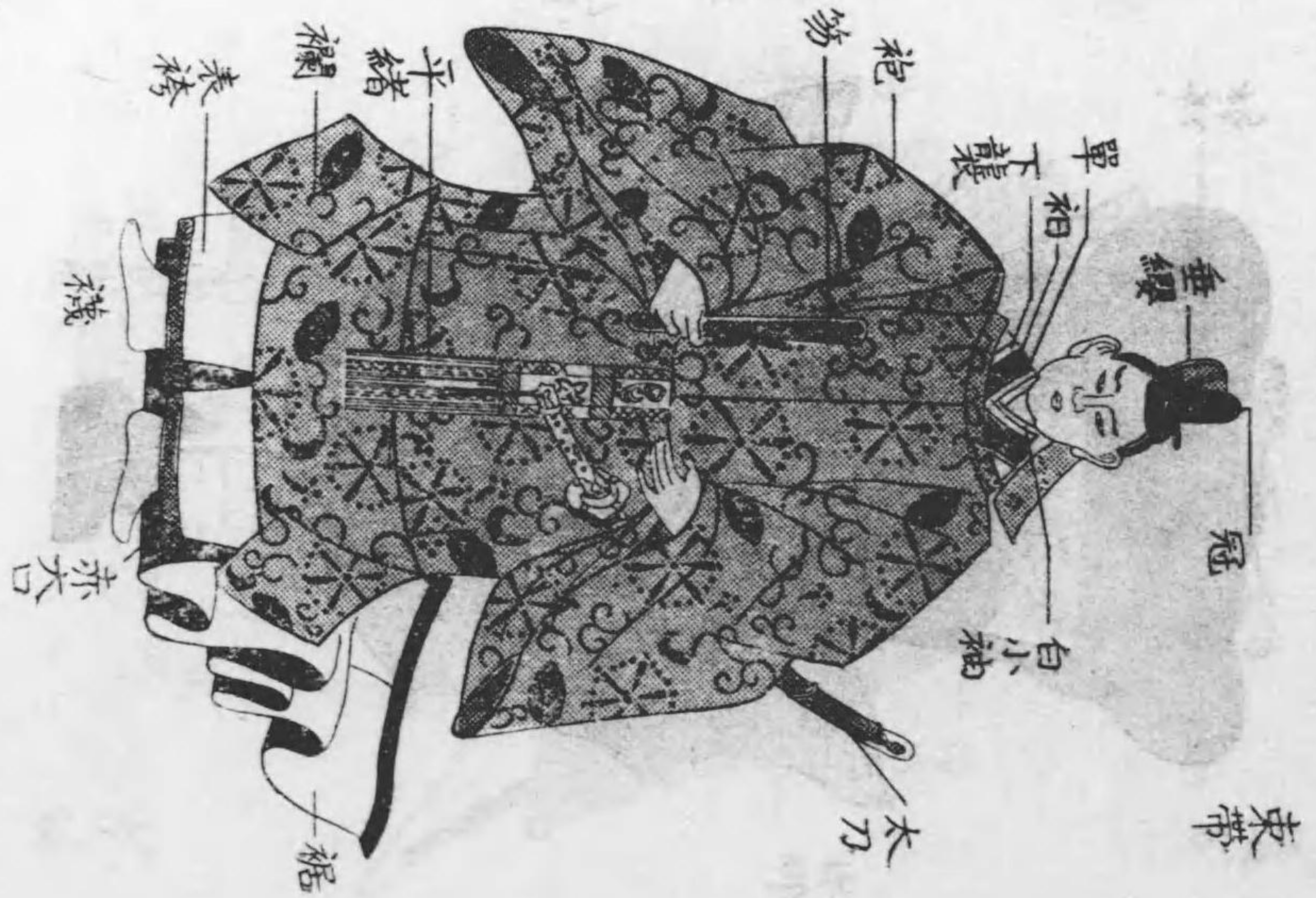
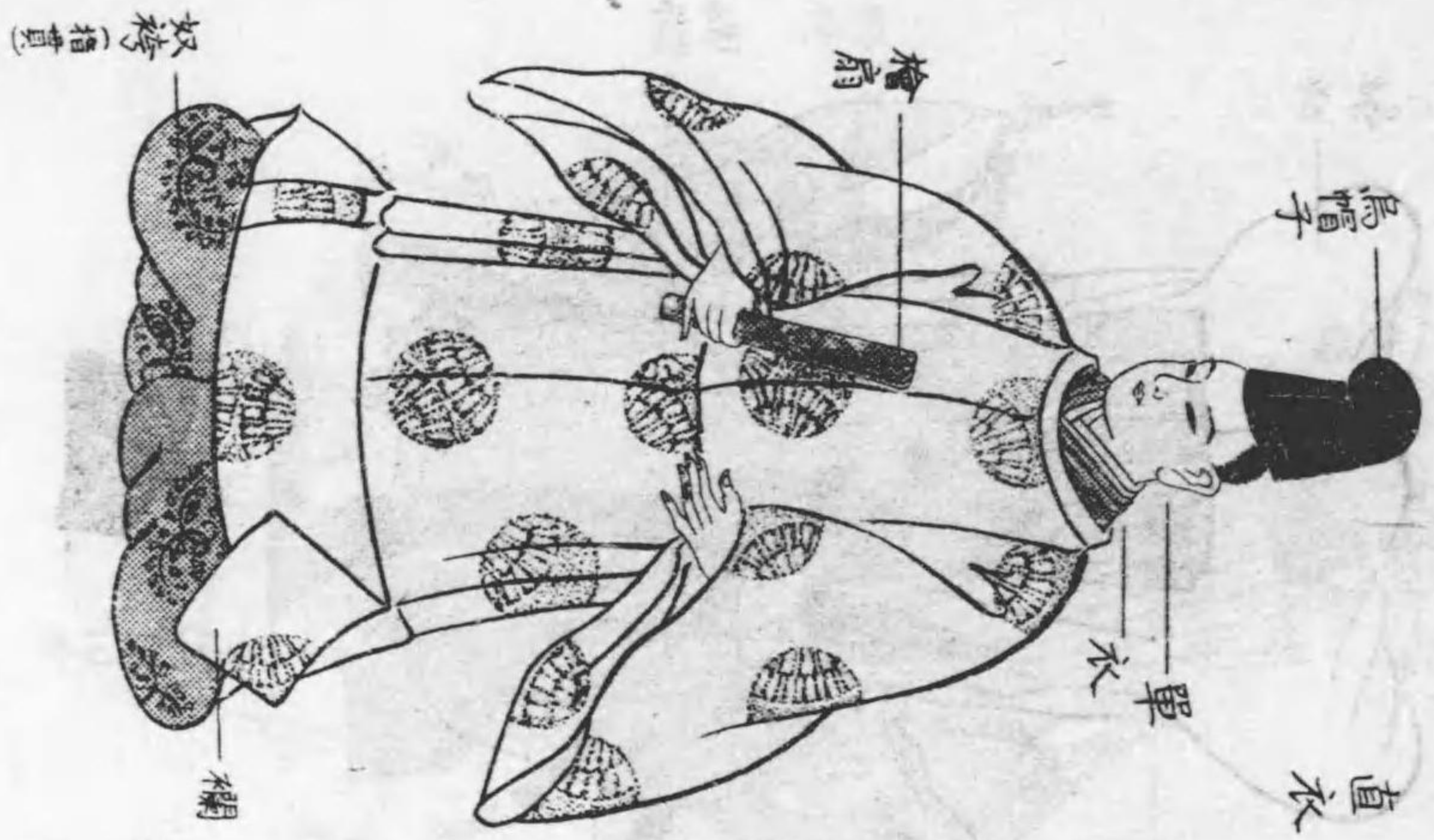
清涼殿の建築は、平安朝の中期に完成したとされる。この図は、その当時の様子を詳細に描き出している。特に、御湯や御手水間などの水廻りは、当時の生活様式を窺うことができる。また、御帳や御書座などの重要な部屋も明確に示されている。この図は、日本の建築史において重要な資料の一つである。

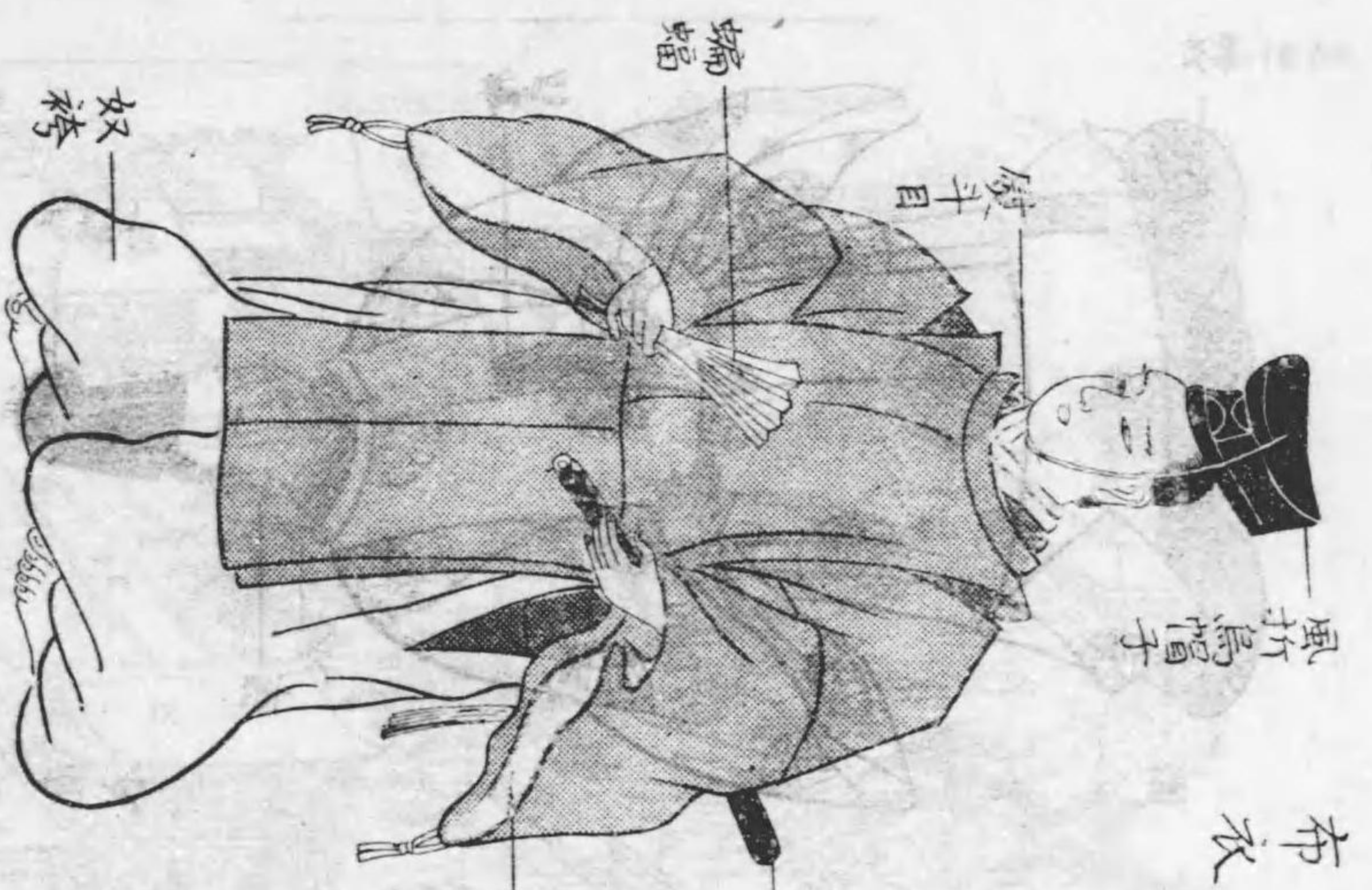
清涼殿の建築は、平安朝の中期に完成したとされる。この図は、その当時の様子を詳細に描き出している。特に、御湯や御手水間などの水廻りは、当時の生活様式を窺うことができる。また、御帳や御書座などの重要な部屋も明確に示されている。この図は、日本の建築史において重要な資料の一つである。



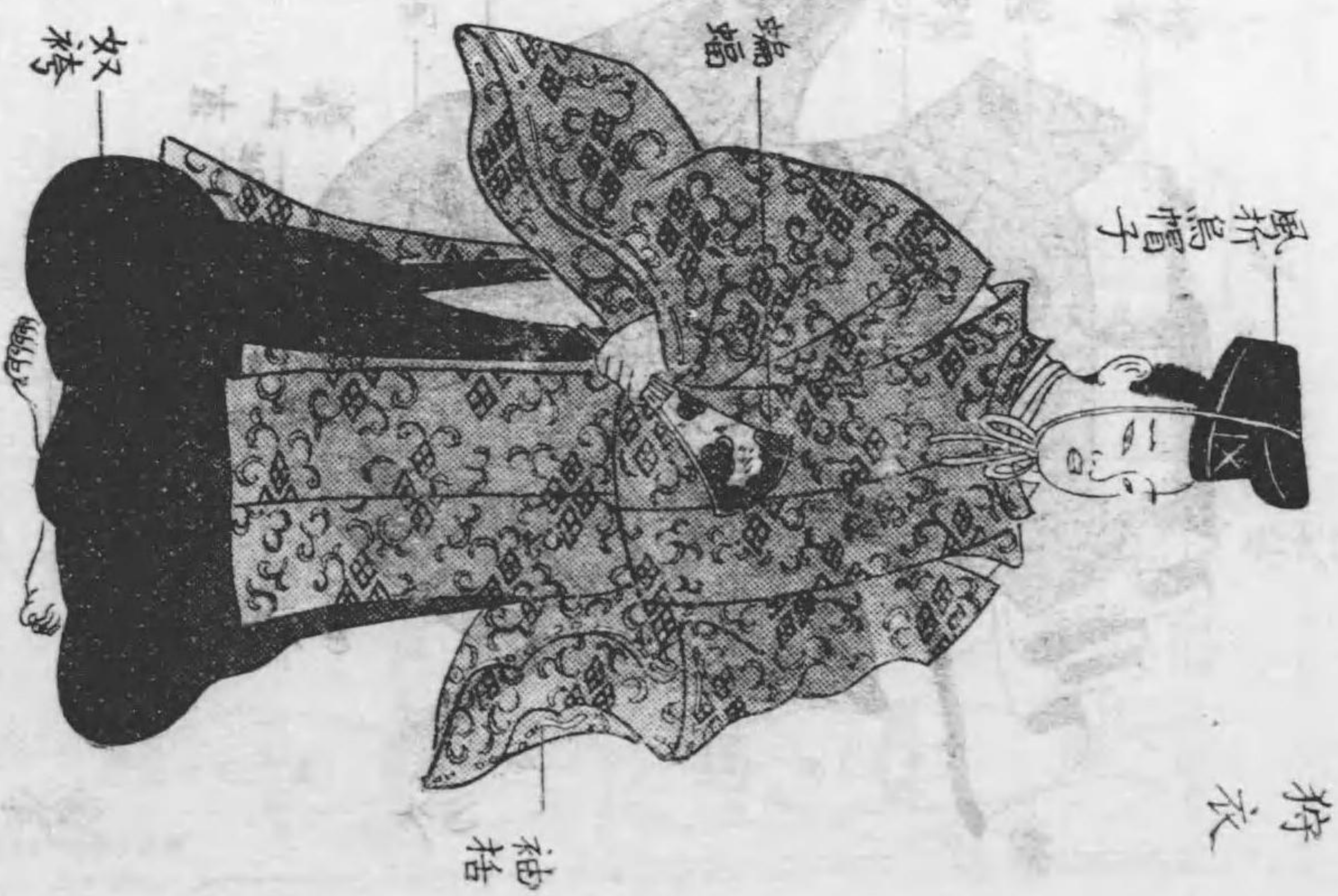
素京刻圖

(卷之四)

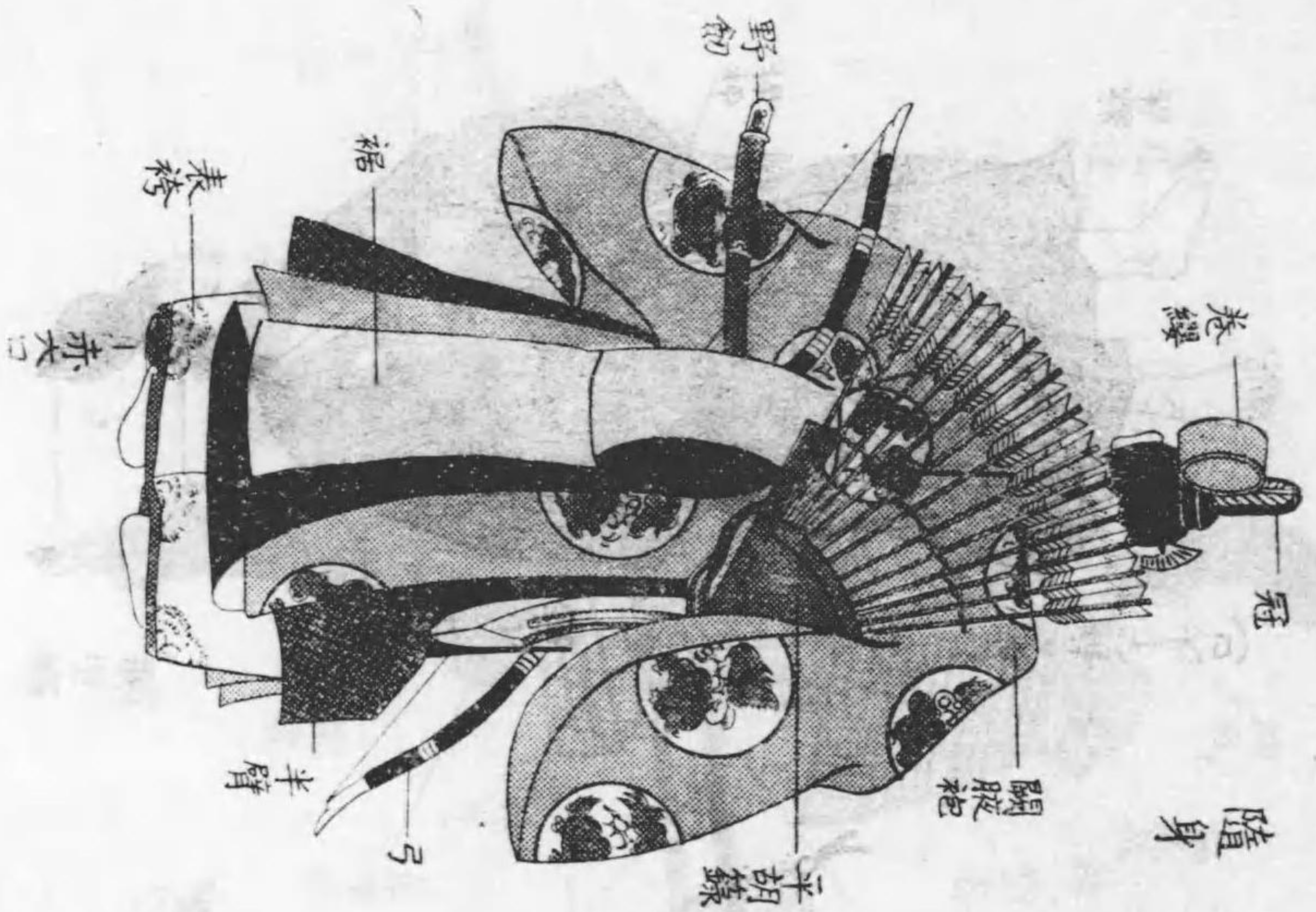




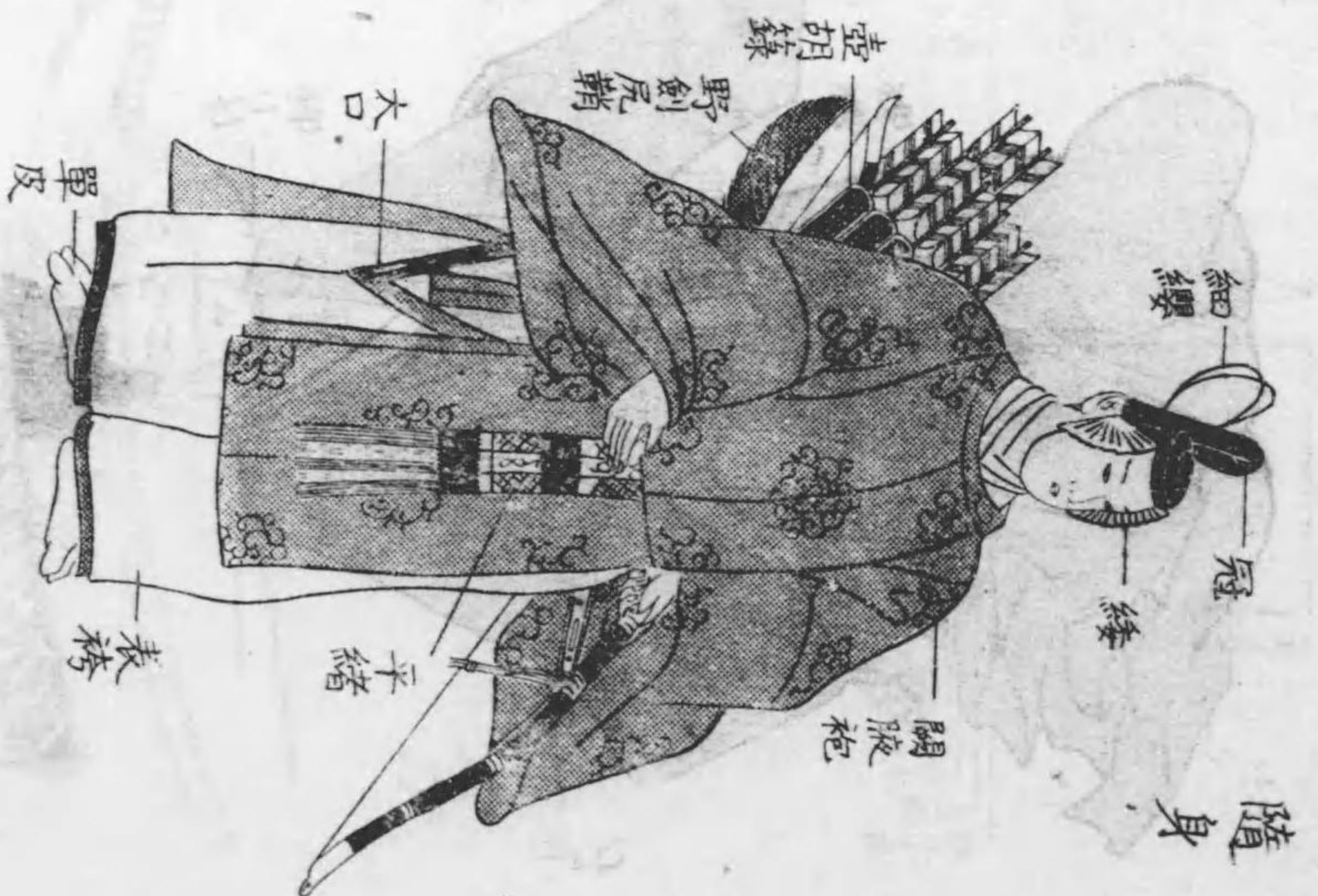
布衣



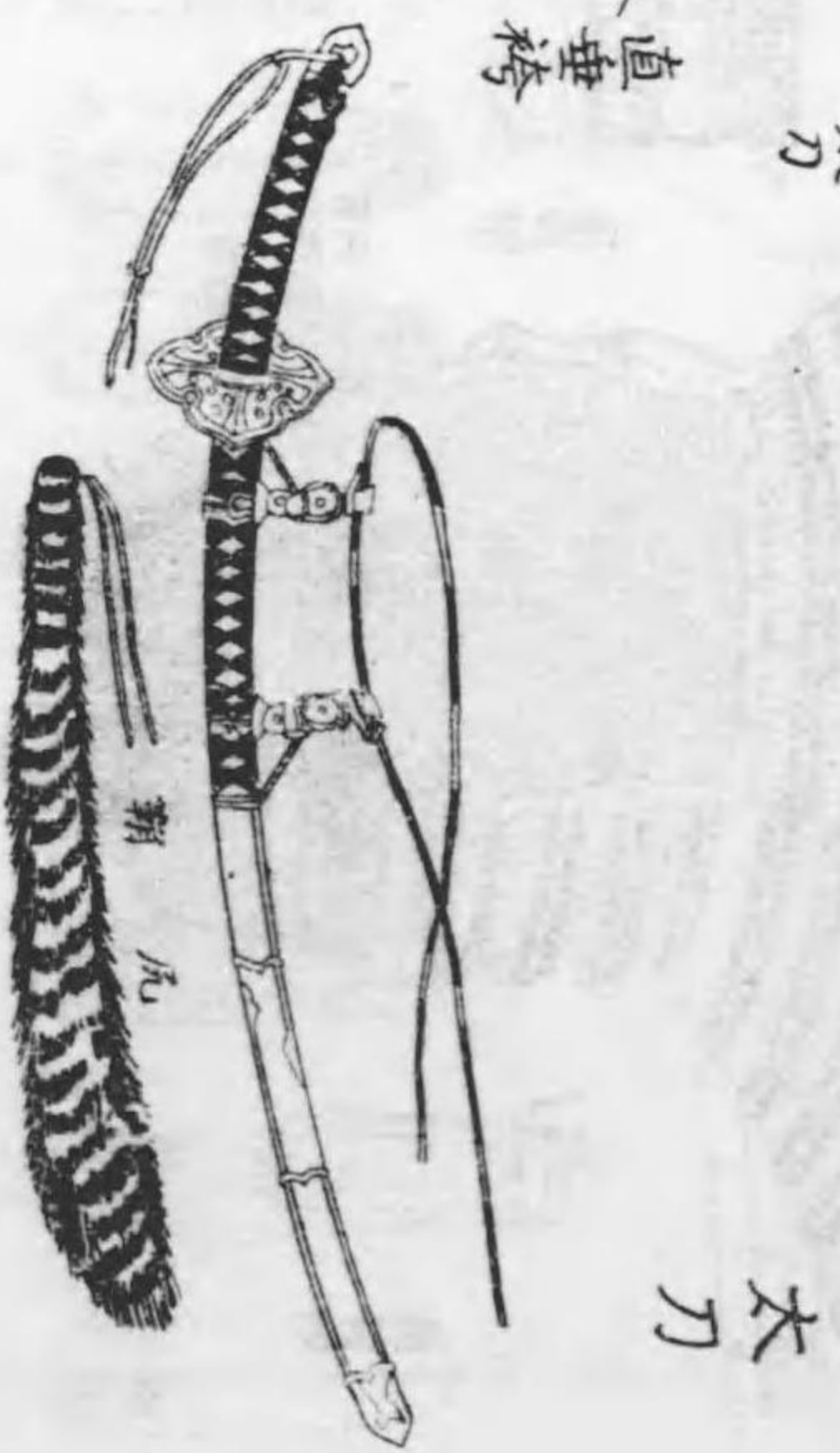
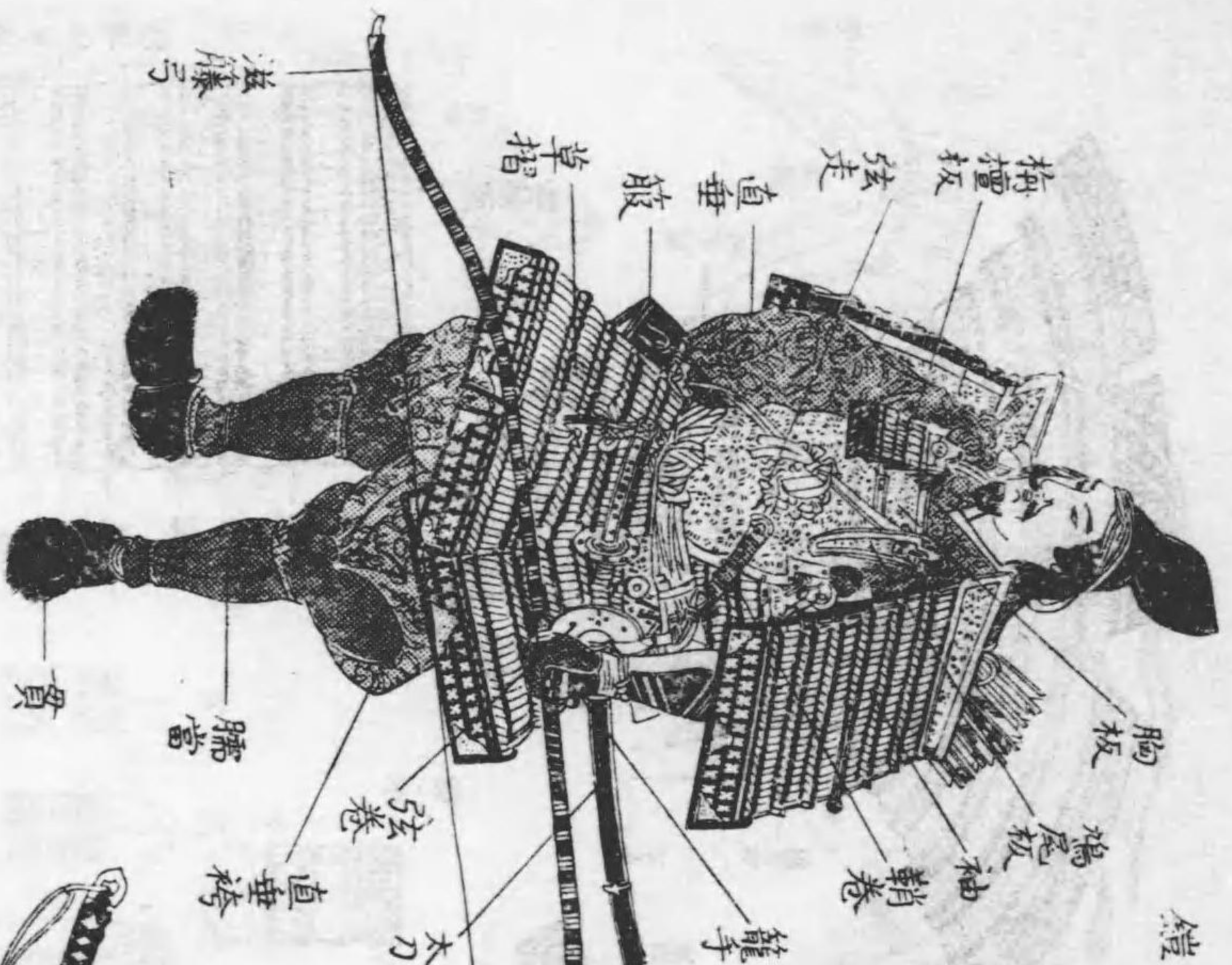
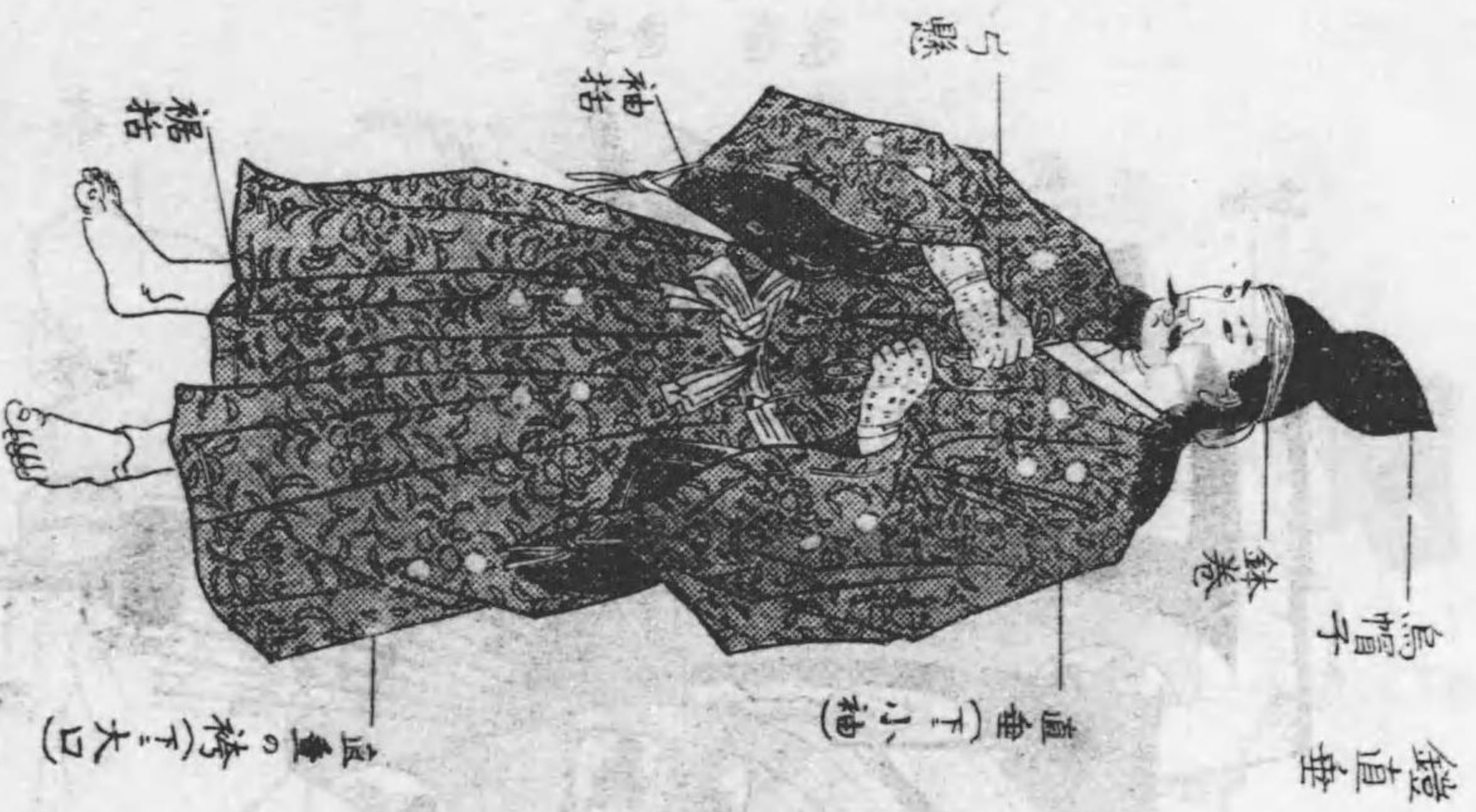
袴衣



隨身

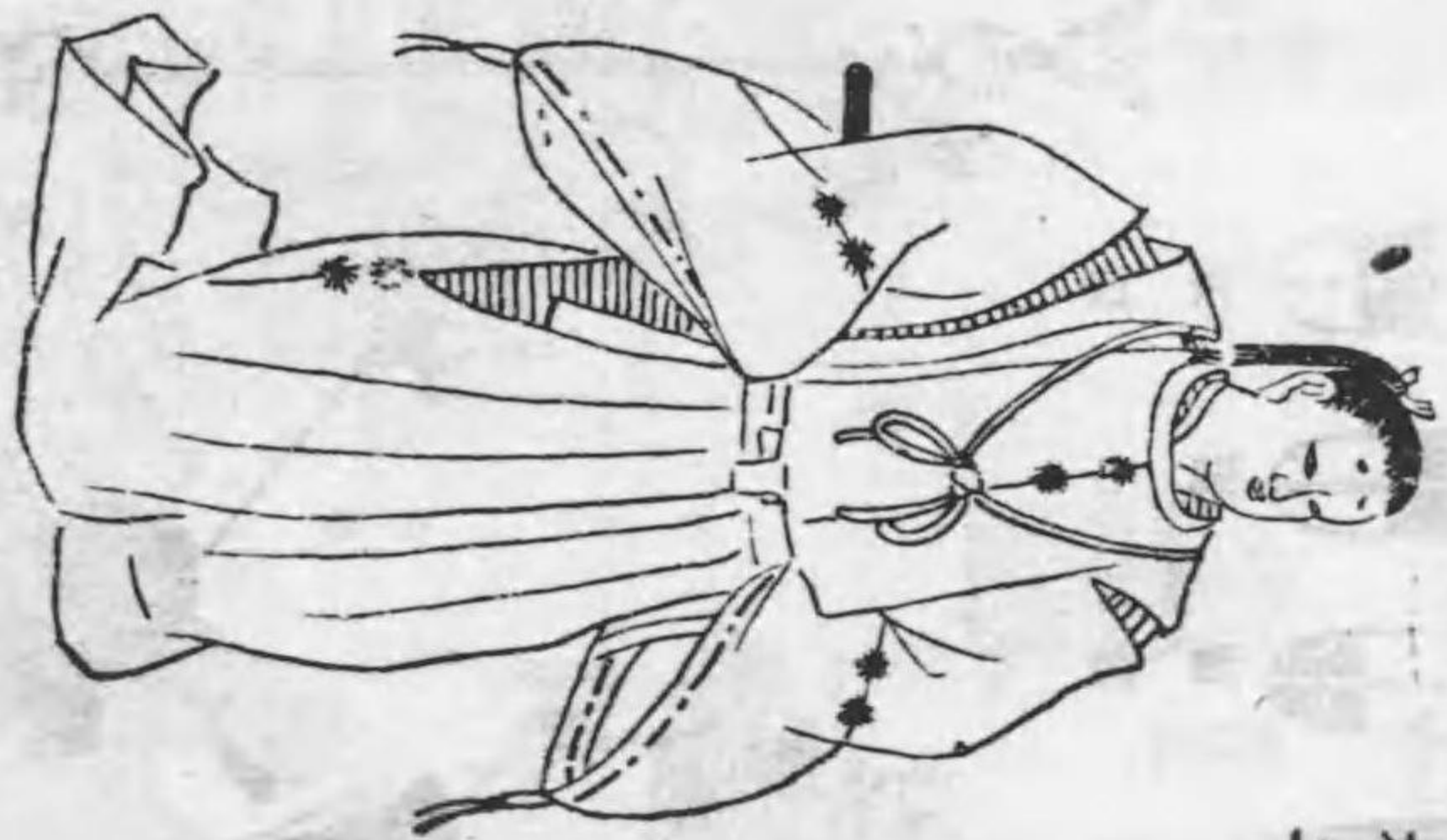
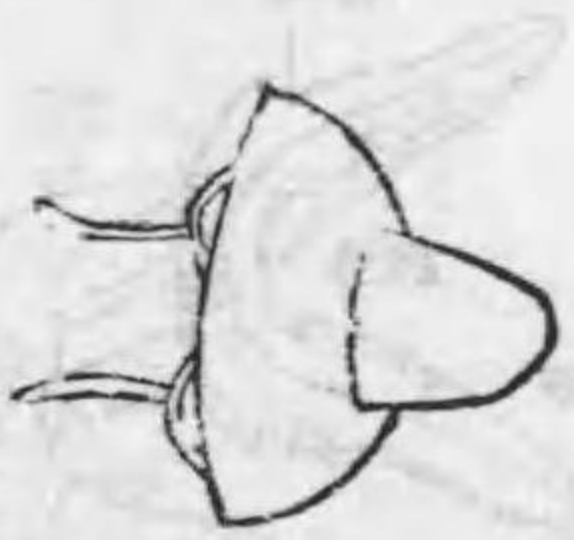


隨身

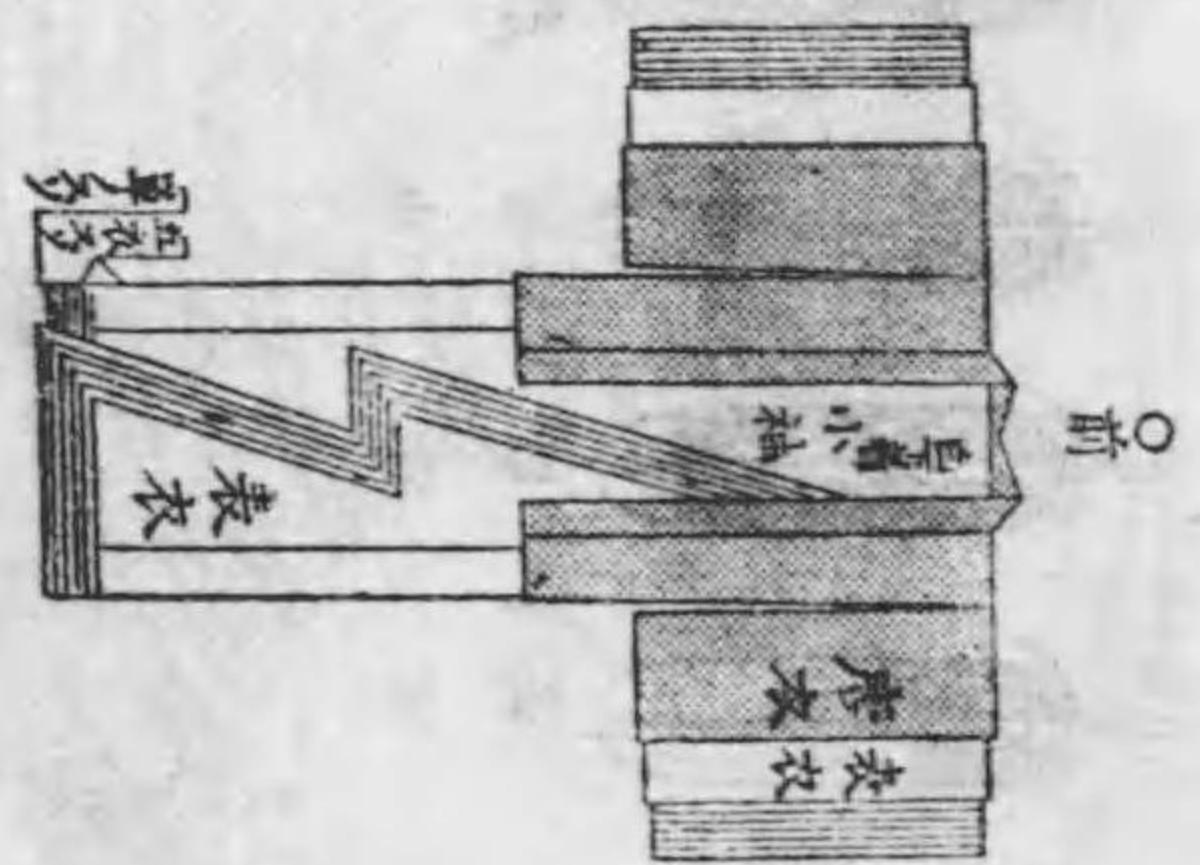




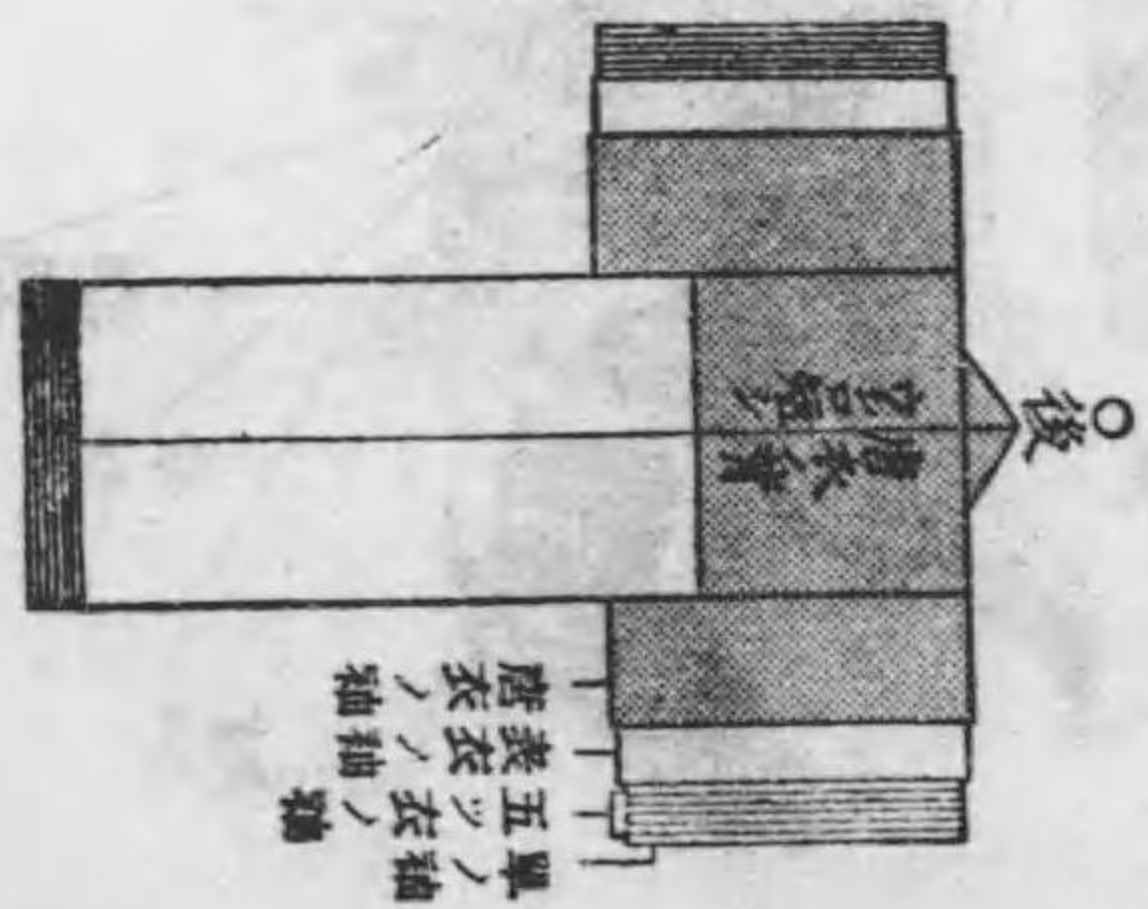
巾女笠



水干



五衣



昭和十五年十二月二十五日 印
昭和十五年十二月三十一日 發

行 刷

流布本平家物語抄

定價金一圓二十錢

編者 野村 宗 朔

發行者 前田 信

印刷者 山本 禎 男

發行所 東京武藏野書院

東京市小石川區高田豐川町四三
振替口座東京六七一四六番
電話 牛込五〇九番

所刷印社文宗社會式株

409
477

終

